

12月2日から、連日大学に泊り込んで、議案書の作成に取り掛かった。今までの様な、決して読まれる事の無い議案書から、読まれ、そして、我々の考え方を理解して貰える議案書を作ろうと思った。

表紙には、当時、流行していたジョージ秋山の漫画の“アシュラ”の顔を載せることにした。表紙に大きく漫画の絵が描かれた学生大会の議案書など明大の学生運動始まって以来であろうし、日本の学生運動の中でも数少ない例だと思う。

本来なら次に一般的に革命論が続く所だが、我々には革命論が無かった。全然、書きたいとも思わなかったが、書きたくても書く事が無かった。我々に有ったのは、闘いを戦い切るという情念だけで有り、それをアフォリムスとして表現する事にした。
少し長くなるが、全文を引用する。

7. 15学生大会における現執行部の登場は
学館解放・八派政治、八派による全共闘引き回し
批判として集約されるだろう。

そして、八派政治、八派による全共闘引き回し
批判は最大限、我々現執行部（69年明大ノンセクト）
自身にに向けられるべき問題としてあった。
すべての闘う諸君との眞の共闘を求めて
一般的に「引き回された」と被害者ぶる醜悪な
ノンセクトとの訣別のためにも。

- 154 -

分散的・閉鎖的サークル集団化を
阻止するためにも。
ニヒリズム・フーテニズム・
ヤクザイズムを払拭するためにも。

大学立法と10・11月闘争を戦った者として
大学立法と11月闘争の関連を見出せなかった者として
明大闘争と11月闘争の結合をなしえなかった者として
自然発生性の拝跪、全共闘の物神化を行ってしまった者として
全てを戦術次元へとひき上げて活動していると批判される者として

現存する諸矛盾（大学立法、入管法、三里塚新空港、沖縄返還
公害等）を何故に、何物から必然的に起こるものなのかをとらへられず、
一方では戦後議会制民主主義に対する幻想制の崩壊が進行しつつも
それにかわる方向を見出だしえないが故に、圧倒的不満を持ちつつ、
個的無力感と矛盾の重さにより直接対峙しえず、
日常性に埋没せざるをえない情状を打破するために。
現実的世界のなかで現実的手段をもってする以外には現実的解放が不可能
であるが故に
我々は、我々自身の現実的存在=明大II部学生としての存在状況を
とらえ返すことから出発する。

革命理論を持たぬ我々は情状に対して係わりきれたか、戦い抜けたかという
一点でしか自らを語り得なかった。そして、それが自己批判となり、今後も
戦いきるという決意表明に終わる一見奇妙なアフォリムスでしか表現し得な
い情念として、最初に持つて来た。

我々の置かれている状況を率直に物語っていた。

次にロックアウト体制の概説を我々の存在状況と併せて書いた。

池田君の「学館解放に向けて」と私の「学館解放に向けた署名活動のきょうおん」と統いて、学館解放闘争が我々にとっての主要な闘争として位置付けられていた。

来年に迫っていた沖縄返還、入管法の問題を取り上げ、最後に6月11日から今日までの我々の活動状況が表にして書いてあった。

議案書は漫画の描かれた表紙といい、その内容も前代未聞であった。党派の諸君からはあれでも議案書かと笑われたが、私は内心無内容な革命論より、我々の現実の姿、我々の思考の水準を有りのままに表現して、学生に呼び掛ける方が良いと確信していた。

大学当局から仮払いされた十万円のお金に触れておくと、印刷機の購入の名目の七万円は、毎日、学生大会の準備で、泊り込んでいた我々の酒と食事代という体の中の印刷機に化けてしまった。

さすがに12月ともなると夜は寒かった。

私たちは10時頃までのクラスオルグが終わると、2時、3時までガリ版を切り、議案書の作成を続け、私などは大学からバイト先に出勤するという毎日だった。

大学に風呂は無かったが、中大の近くにタオルさえ持って行けば、石鹼、シャンプー、カミソリを一回分づつ売っている風呂屋があり、バイトの帰りに良く出掛けた。風呂屋は始まったばかりの時間で、空いていた。客といえば、駿河台あたりの店屋の老店主といった風情のお爺さんが二、三人、民謡などを語りながら入って居るだけだった。広い湯船に身を浸しながら、お爺さん達の謡う民謡に耳を傾けていると、江戸の神田情緒が感じられた。

全共闘の若者と神田のお爺さん、全く似ても似つかぬ取合せであったが、私にはそれから始まる忙しい時間を前にしたのんびりした一時だった。

午前2時頃、私たちの一日は終る。

毎日決まって寝る前に記念館の裏に在った中華料理屋“晩翠”に出掛け、餃

- 156 -

子と焼きソバを食べ、ビールを飲むのが、泊り込み期間中の楽しみだった。特に餃子が美味しかった。この間に御茶ノ水界隈で開いている店はここしか無かったが、その条件が無くとも“晩翠”は御茶ノ水でも美味しい店の一つに数えられる店だった。

忙しくも楽しかった10日間を経て、我々は12月11日を迎えた。

12月11日、私は昼過ぎに学苑会室で目を覚ました。

昨日は、今日の大会の立看造りや会場に張るスローガンの垂れ幕作りや最後のステッカー張りで結局、眠りに着いたのは6時過ぎ、夜も明けようとする頃だった。

昼過ぎに重い頭で起き上ると、3時から準備に取り掛かる事に決めた。

岡田、池田、小林、永田といった面々のどの顔を見ても、さすがに疲れきった顔をしていたが、一人一人とても良い顔をしていた。この半年、彼らと一緒に自治会を担って来た事は改めて素晴らしい事だと実感した。

3時まで暇だった。

師弟食堂で朝食とも昼食ともつかぬ食事を取ると、なんだか学苑会室に戻るのがおっくうになってしまった。これは私のクセなのだが、何か大事な事を目の前にすると、急に一人に成りたくなってしまう。この心理には緊張感から一時的に逃れたいという気持ちとナルシスティックに一人その緊張感に浸りたいという、正反対の感情が入り交じっていた。

最近は行かなくなつたが、以前、経研のサークル時代に上江洲さんとよく出掛けた“タロー”に行き、3時まで、私はぼんやりと時を過ごした。

11号館の学苑会室に戻ると、皆が学生大会の会場作りを始めていた。「この忙しいのに何処に行ってたんだ。」と永田君に怒られてしまった。「疲れていたので、茶店で寝てたよ。」と答えると、「しょうがないなア。」91番教室に功二たちが行っているから、そっちを手伝ってやってくれ。」と言われた。

- 157 -

9番教室には高見、山本、安能君といったべ平連の面々や青解の諸君が来ていて、演壇造りや舞台の後ろにスローガンの垂れ幕を吊り下げる作業を始めていた。

会場の入口に机を引き出して受付けを作り、学生大会の会場を示す大きな立看を入口近くに立て掛けた。

5時過ぎには会場の準備も整った。

学苑会室に一度戻り、議案書や代議員証などの書類を会場に運んでいると、11号館の方から、小島、池田君らの学生大会の成功へ向けたアピテーションが始り、それに呼応するかの様に記念館前では小林君らのアピテーションも開始された。

9号館や10号館の方からは青解のアシも聞こえて、学内は登校して来る学生が増えるとともに学生大会への雰囲気が盛り上がって行った。

私も受付けを始めたが、代議員はなかなかやって来なかつた。

受付けの机は入口の外に置かれているので、12月の寒さには閉口した。

6時を過ぎた頃から、代議員や傍聴者も次第に集まりだして来て、彼らに代議員証や議案書を配布したり、代議員数の集計をしたりと忙しくなって来た。いつの間にか寒さは忘れていた。

6時半を過ると、各党派やサークルの面々も続々と集まって、広い9番教室も満員に成って來た。

7時前、出席代議員数は開会定足数の百八名を突破した。

7時、定刻に学苑会学生大会は開催された。

満員の会場は人息れとタバコの煙りと人々の喧騒が渦巻いていた。

この様に学生大会が或る種の熱氣と盛り上がりの中で、開催されるのは68年学苑会が新左翼系と民青系に分れて以来だった。

ノンセクトの我々がどの様な方針を打ち出すのかということは党派のみならず、学内の諸団体や一般学生の関心を集めていた。この間の学内闘争に重点を置いた我々の運動に対する評価も高まっていた。そして、何よりも民青系に対する我々の柔軟な対応は彼等のシンパ代議員も出席するという形となつて現れた。

- 158 -

定数以上の代議員の出席を確認して、私は学生大会の開催を宣言した。執行部から、池田、永田両君が、青解から平田君が議長に選出されて、大会が始まった。

最初に、小林君が委員長代行としての基調報告を行つた。

続いて、池田君がこの間の学館解放闘争の経過を説明した。

私が署名活動の報告を行つた。

永田君が沖縄返還、入管法問題についての提議を行つた。

その後、寮闘争など各闘争委員会が各自アピールを行つた。

青解、ブンド戦旗派の付帯決議案の内容が説明された。

松岡さんから財政報告がなされた後、討議に入った。

民青系シンパと見られる代議員から、学内に於ける暴力に関する意見が述べられたが、たちまち場内のヤジに搔き消されてしまった。続いて、ブンド系の代議員から執行部は階級闘争に対する明確な方針を持ち得ていないと批判がなされた。この点は我々の弱点だったが、7月の大会の時の様に憚ることも無く、学苑会は全共闘に隸属する事務執行機関であり、特定のイデオロギーに集約するのではなく全ての闘う諸君に開かれた存在でなければならぬという視点から反論を加えた。この反論はブンド戦旗派の様に大衆組織論に弱い党派に対しては有効な反論だった。

続いて、青解からは我々の運動に対して未熟な点を感じつつも評価するという意見が述べられた。（次期執行部人事では青解との間で、ボス交が成立していた。）

次期執行部の人事案が発表された。

委員長	小林（功）
副委員長	平田（青解）
事務局長	永田
財政部長	小林（博）
組織部長	石川

- 159 -

その他、中村君や青解のメンバーも入っていた。

活動方針、予算案、人事案を含めて、一括の採決がなされた。

民青系の代議員は大会委任状を出して、議場を去って行った。

ブンド戦旗派系の代議員二十人程度が保留の票を入れた。

百三十票以上の圧倒的多数の投票を得た。

我々の執行部は再度信任された。

11時頃、大きな拍手の内に学生大会は成功裡に終了した。

各種のスローガンを採択し、インターナショナルの大合唱の後、恒例になっ

ている御茶ノ水駅までのデモ行進を約三百人の隊列を持って行って散会した。

皆がデモに出発した後、会場に残って代議員証の整理やメモ類の片付けをしていて、学生課の上西さんがやって来て、「石川君、成功したね。これじゃ大学当局もケチの付けようが無いね。」と言ってくれた。

「当然の事ですよ。」と素っ気なく答えたが、内心、「やったぞ！」と叫びたかった。

代議員の水増しを行わずに学生大会を成功させたことに満足だった。

同時に党派、特に青解とのボス交に応じなければならなかった我々の力の限界を感じて、何か、我々の運動の外堀が埋められてしまった様なやるせなさも感じた。しかし、今は満足感の興奮と肉体的な疲労感が私を包んでいた。

二、三日後、学苑会事務局と学生部の団体交渉が行われた。

大学当局も我々の新執行部を正統な学苑会執行部として承認した。

この席で、凍結されていた学苑会費四百万円も我々の手に渡された。

学生大会の成功で、この年の学内の諸活動も終止符を打つ所だが、我々には学苑会室の問題が在った。

今日まで、11号館の商学部の学生控室を占拠して、仮の学苑会室として使

用して来たが、この部屋は冬休みに入るとロックアウトされてしまう事になっていた。

本来、学生会館が開いていれば、学館内に専用の学苑会室を持っていたのが、現実に学館は使用出来る状態ではなかった。やむなく、新学期が始まると、元の11号館に戻るという条件で、大学側の勧告に従ってサークルの部室が多数入居していた4号館の一階に引っ越しした。

大学当局は学苑会室に電話を開設した。

4号館は記念館から道を一つ隔てた所に在り、木造の二階建てのかなり古い建物だった。裏側は5号館に繋がっていた。

各党派は既に4号館に移っていた。活動家レベルの活動にはサークルも多数入居していたし、モグラ横町にも近くて便利なのだけれども、一般学生との関係では大学のメインストリートのマロニエ通りからは遠かった。

学苑会室の引っ越しを最後に私たちの70年度の全ての活動は終り、来春へ向けた短い冬休みに入った。

松岡、岡田、小島、池田君など優秀な活動家が執行部から去って行った事は、我々を少なからず弱体化させて行った。

1月6日、年が明けると早々に、私たちは学苑会室に集まり、今年度の活動方針の決定に向けた討議に入った。

今年度の前半に予想される政治闘争の課題は、2月の三里塚・成田新国際空港反対闘争、5月の沖縄返還闘争が予定されていた。

これらの学外政治闘争に積極的に取組み、また、学内闘争は対民青関係は現在の状態を維持し、学館闘争は実績を積重ねて長期的に解放闘争を展開して行き、党派との関係は現状の友好関係を維持していくことが確認された。

学苑会執行部が民青を除く総ての諸党派、団体、一般学生、大学当局をも含めた広範な諸勢力から支持されてしまうと学内は急速に平和になり、逆に、

学館闘争などの学内闘争は手詰まり状態になってしまった。

我々は目を学外の政治闘争に向けようとしたが、学外の政治闘争を組織し、何処で我々自身を表現して行くかということになると我々の力量は全く無に等しかった。

全国全共闘連合は崩壊していたので、執行部に介入していた青解と共同歩調となることが多くなっていた。

小林委員長は学内での政治闘争への気運を盛り上げる為に1月末に再度学生大会を開催する事を提案した。しかし、私はこの提案には反対だった。

学生大会というものはそんなに軽々と聞くものではないし、準備期間も無く開けば必ず水増し代議員を作らなければならず、運動にとってマイナスの結果をもたらす事、そして、何よりも本来的意味で運動が存在し、その上で学生大会を開催して運動を盛り上げるのならいざ知らず、学生大会を起点として運動を起こそうという発想がそもそも間違っていると思った。

学生大会を政治闘争に平行移動することには始めから無理が有るし、せっかく勝ち得た水増し代議員無しで、学生大会を成功させたという我々の誠実さや実績を壊してしまうことに我慢がならなかった。

小林君の意見は現状に対して、学苑会は打つ手が無いのだから、学生大会を開催することによって、現状を打開し春の新学期へ運動を繋いで行くべきであるという考えだった。

私は小林委員長らの執行部との意見の対立は次第に深まって行った。

結局、学生大会は1月26日に開催することになったが、私はどうしてもこの決定に納得が行かなかった。

小林君に今回の学生大会の開催には反対であり、この決定に従うことは出来ないと申し入れた。

1月の学生大会の準備は青解の大貫君らが中心になって進められ開催されたが、12月の大会の様な盛り上がりは無かった。我々執行部の動揺を見透かす様に青解を中心とした党派の介入がしだいに進んでいた。

- 162 -

我々は政治闘争に対する方針を出せないままに春休みを迎ってしまった。例年のことながら、春休みに入ると学内は急に静かになり、殆どの学生は帰省してしまい、新学期の始まる4月中旬までは戻らなかった。

4号館だけは例年なく活気を帯びていた。2月下旬に予定されていた三里塚の第一次強制収用の執行が目前に迫って来ていたから、それに対する粉碎闘争の準備が各党派、闘争団体で進められていた。

その様な4号館の活気から、学苑会室だけが一人取り残されていた。

1月の学生大会は失敗に帰し、春休みに入っても新学期からの運動の展開の方向が見出だせず、方針が出なかった。

学内基盤しか持たないノンセクトの限界だった。

与えられた情況への対応は出来ても、外的政治情況との関わりに関しては我々の力は皆無だった。空疎な討論を繰り返すうちに党派から派遣されていた執行委員は会議にも出て来なくなり、結局、事務局会議の出席者は小林、永田君と私だけになってしまった。組織論、戦略論といった堂々巡りの討論だけが毎日続いた。答えは出なかった。

2月に入り、私たちはただ焦るばかりだった。

そんな或る日、小林君が永田君と私に打ち明けた。

「僕は今度、青解に入って運動するつもりだ。ノンセクトとしての自分の限界を感じてしまった。」と言うのである。

彼の言葉を聞いた時、返す言葉が無かった。

半年前の小島君と同じじゃないか、所詮は君もノンセクトの限界を認めてしまうのかと思ったが、一緒に運動を担って来た者として、同時に彼の気持ちが痛いように解った。委員長としての立場が、最終責任者としての立場が彼を党派に走らせたのだろう。しかし、一方で「私達が批判し、その中から産まれて来た私達の運動はどうなるのだ。」と私は言いたかったが、共に戦ってきた同志、友人としての想いが言葉を失わせて、私たちを包み込んでいた。

3月に入っても、私たちは遂に方針を打ち出す事が出来なかった。

6月までは現状の学内情勢を維持して、6月の学生大会までに我々の運動の

- 163 -

総括を出して、執行部を退陣しようとの結論に達した。

小林君は今後、青解の一員として活動することになるが、学苑会の委員長でいる間は党派性を持ち込まない事を約束した。

永田君は今後三里塚闘争に関わって行きたいと言った。

私は新入生歓迎集会を責任を持って行うことになった。

各々が自分が関わりきれる情況を見出だして、その中で動ききるより外にどうしょうもない所に、我々は来てしまっていた。

2月23日、三里塚では第一次強制収用の代執行が行われる予定だった。午前10時頃から、明大では各党派や団体が4号館前で、学内集会を行っていた。学苑会として闘争を組織する事はとうとう出来なかった。

私は何処の隊列に入る気もせず、また、入るべき隊列も無かった。

4号館前の集会を遠くから眺めているだけだった。

皆が成田の現地に出発した後、一人その場に取り残されていた。

私は背中のナップザックにサ連協の黒のヘルメットを入れて一人で、成田に向かった。

駅を出ると、直ぐに機動隊の毎度お馴染みの手荒なボディチェックが待っていた。その列を抜けて、バスに乗り現地に着くと、各党派や各団体のデモがあちらこちらで行われていた。前方には駒井の団結小屋、駒井砦がその勇姿を現し、各党派の旗がはためいていた。

2月の風は冷たかったが、陽射しは暖かく、土手のような所に腰を下ろし、ポンヤリとデモを眺めていた。

デモ隊も機動隊も砦も田園風景の中に吸い込まれ、まるで何か、時代劇のロケ現場に迷い込んだような錯覚に捕らわれてしまいそうだった。

土手でひなたぼっこをしていると、見知らぬ人が話しかけて来た。

「明大のサ連協の方ですか。最近はあの白地に緑文字の大きな旗は見掛けませんが。」

「もう、無くなりました。」

この日、機動隊も遠くからデモ隊を見ているだけで、何も起こらなかった。

私も入るデモ隊列も無いまま、一日、土手でひなたぼっこをしていた。

二、三日後に、成田の第一次強制収用の代執行の惨劇が起り、三里塚の地は再び多くの血を吸い込んだ。

学苑会は三里塚闘争を独自に組むことは出来なかったが、永田君を始め、多くの活動家が各党派や各種の組織で、現地入りして戦っていた。

この闘いで、後に明大Ⅱ部から七名にのぼる逮捕者を出したが、学苑会として全ての逮捕者を党派、団体に關係無く、学苑会三里塚現地行動隊として追認して救援活動を行った。

3月、三里塚闘争の熱気からは離れて、私は新入生歓迎集会の準備を始めた。

先ず、メンバーを青解の大貫君、戦旗派の飯田君、Ⅱ商の福田君と集めた。研連からは福留君の参加を求めて実行委員会を作り、新入生歓迎集会の企画準備に取り掛かった。

70年はロックアウトの中で入学式が行われ、学苑会も機能出来ない状態だったので、新入生歓迎集会は行われなかった。

以前は、二日の日程で、一日目は各自治会の紹介と映画の上映が行われ、二日目を各サークルの紹介に充てて、新入生一人一人に自治会やサークルを紹介したパンフレットが配布されていた。

この新歓を通じて一人の友人と出会い、以後の明大で私が行う活動は彼と共にに行うことになった。

青解の大貫憲一君はⅡ文自の活動家だった。彼は一度中大に入学し、その後中退して芸大を目指したが、失敗して明治にやって来たという変わり種だった。当時の青解では彼のような感性の持ち主は荻野君らとは何処か肌合いが

合わなかった。

新入生歓迎集会を一緒に行う中で、私と彼は急速に親しくなって行った。

大貫君の体格は背は高かったが痩せていて、私と対照的だった。

早速、新歓実行委は大学当局との交渉に入った。

大学側は例年二日間の日程で行われていた新入生歓迎集会を一日で行う様にと要求して来た。私たちはこれもロックアウト以降の一連の大学当局の抑圧と受け止めて強く抗議したが、大学当局の姿勢は強硬だった。

何回か交渉を重ねたが、解決に至らなかった。このままでは新入生歓迎集会が開催出来なくなってしまうので、やむなく、今年は一日の開催を受け入れるが、来年からは例年どうり二日の開催を約束する学生部長名の文書の提出を求めた。大学当局もこの要求を受け入れ交渉は妥結した。

交渉は主に私と市毛副学生部長との間で行われたが、この交渉を通じて、市毛教授との間には何とも言えぬ信頼感が生まれたことは、その後の様々な交渉の上で、大いにプラスになった。

お互いに気性がさっぱりしていた点が似ていたのだろう。

金額の交渉はスムーズに進み、大学が二十五万円、学苑会が十万円を新歓実行委に出すことが決まった。

企画の作成に入り、映画は『アルジェの戦い』を上映することにした。

この映画はアルジェリアの解放闘争を描いた映画で私の好きな映画の一つだった。始め、新歓実行委内部には『虐殺の森』や『三里塚の夏』などの左翼映画を上映したらどうかとの意見も一部に有ったが、これには強く反対した。私は内心『俺達に明日はない』か『明日に向って撃て』を上映したいと思っていたが、それはヤリ過ぎというか、皆の賛成を得られないと思い『アルジェの戦い』を提案した。上映が決定して、具体的に映画会社に問い合わせると『アルジェの戦い』のフィルムは三十五ミリの一般映画館用なので上映も専門家に依頼しなければならず、フィルムもニュープリント版だとかいうことで、少々予算オーバーになってしまった。

- 166 -

映画の上映と共に新入生歓迎集会の大きな目玉である新歓のパンフレット作りが同時に進行していた。新歓のパンフレットが何故、重要で有るかというと、我々が数多く作る印刷物の中で、唯一、このパンフだけがオリエンティーションの時に大学側の手を借りて、新入生一人一人全員に確実に配布されるからである。

パンフは友人の小野田さんに印刷を依頼したので、予算よりも安く作ることが出来た。

新歓のパンフの中で、私は序文と最初に載る実行委員長としての挨拶を書くことになっていた。当初、黒田喜夫論、特に『詩人は飢えた子に何をなしえるか』について書こうと思っていたが、どうしても私の力量の及ぶところでは無かった。結局、私たちが置かれている71年の現況をアフォリムスにした『メルヘンの解体』を書いた。序文は私たちにとって関係の深い単語を羅列したものにした。それは安保に始まり沈黙に終わる無秩序な言葉の群れだったが、この単語の一つ一つの中に私たちが居たような気がする。

この様な序文と巻頭のアフォリムスも今までのパンフには見られない斬新な文章として、党派の諸君には不評だったが、他の人々には好感を持たれた。意識的にも無意識にも私は情況を越えるには従来からの党派的な運動では駄目だと感じていたが、政治的な表現は行き詰まても、文化的な領域など情念の先行する場では確実に彼等を越え始めていたと感じていた。そして、私個人の中でも次第に政治的運動の敗北感を情念の領域の中に埋め込もうとする思考が芽吹き始めていた。

私たちは入学式会場の武道館前で、ビラを配り、オリエンティーションで、パンフの配布を行って新入生歓迎集会の当日に臨んだ。

例年通り、中庭には各サークルの出店が作られ新入生の勧誘が行われていた。この光景は毎年変わる事なく、日が暮れなずむ春の宵の中で繰り広げられる楽しい風景であり、一年の始まりの風物だった。

沢山の出店の中で、高橋、宮本君らがマル研の出店を出して新入生の勧誘を行っていた。サ連協の崩壊の後、彼らはし戦線に加入することも無く、政治

- 167 -

運動から離れて、独自にサークルとしてのマル研を再建していた。

私は彼らの行き方を否定する気はさらさら無かった。し戦線的醜悪な運動を展開するくらいなら、学生運動と関わることの無い所で、サークル活動を行う方がよっぽどましだと考える様になっていた。私自身はサークルという所からは余りにも遠くまで来てしまって、もうサークルに戻ることは出来なかったが、四年前、私もこの前をオドオドと、また、胸を膨らませて歩いた時が懐かしく思い出された。

彼らと別れて記念館に戻ると、大貫君達があらかたの準備を終えて待っていた。

映画会社の人と上映に関する簡単な打ち合わせの後、各自治会、闘争委員会との打ち合わせを行い、各々の挨拶は10分以内とし、サークルの紹介は各々5分以内とする事に決めた。

時間的なスケジュールはそれでも可なりきつかった。

学生運動の常として、挨拶は自然にアジ演説調になり、時間はおおにして延びる事が多かった。どうも、アジ演説には自己陶酔の要素が有る様だ。

定刻の6時に新入生歓迎集会は始まった。

会場の記念館はほぼ八分通りの入りで、熱気に包まれていた。

各党派や各種団体の旗が二階のバルコニーから垂れ下がり、後方に多くのスローガンが垂れ下がった舞台の中央には演壇が照明の中に浮び上がっていた。入場者も続々と増えて、大成功だった。

最初に、私が実行委員長としての簡単な挨拶を行った後、例によって学苑会委員長の小林君をかわきりに各自治会代表のアジ演説調の挨拶が続いた。

集会の進行が一段落したので、会場の外に出ると学生課の上西さんがいた。

「おめでとう石川君、大成功じゃないか。」と話しかけて来た。

「まあ、まあ、ですよ。」と私も満足げに答えて、「『アルジェの戦い』はニュープリント版ですから、上西さんも見て行くといいですよ。」と言うと、「そうだね、見せてもらおうかな。」と言うので、「それじゃ、始まったら、中に入って来て下さい。」と言って、会場に戻った。

- 168 -

私は満足感と同時に虚しさを感じていた。

我々の学苑会執行部が内面的に次第に追い詰められて行くのとは正反対に外面向的な力は定着して行った。

今日では民青系も学苑会の名ではビラを配ることも無く、学苑会は学内の諸勢力の調整機関としての役割を充分に果たしていた。

この一年間、明大Ⅱ部では新左翼間の内ゲバは姿を消していた。

青解、戦旗派といった党派も正面きっては我々を批判出来ない状態で、学内には或る種の秩序が出来上がって来ていた。

確かに我々はこの間の学内外の諸問題、諸闘争にノンセクトという自由さ故に過去の党派の執行部には見られなかった誠実さを持って取り組んで来た。

会場では研連の福留君の挨拶が始まっていた。

ペ平連、Ⅱ商闘、救対などの挨拶の後、各サークルの紹介が続いた。

9時近くにサークルの紹介も終り、いよいよ『アルジェの戦い』の上映が始まった。この頃になると帰る参加者も目立ったが、それでも半数近くの人が残り、熱心に映画に見入っていた。

新入生歓迎集会を成功裡の内に終えることが出来て満足だった。

各党派や各団体の人たちにお礼を述べ、会場の後片付けを終えて、大貫君ら実行委員を連れて食事に行った。

皆、歓迎集会が成功したので、話も弾み帰ってくると2時を過ぎていた。

その夜、私たちは満足感と疲労感に包まれて、4号館の学苑会室のベッドで眠りに就いた。

私は池袋の“白鳥”で一人の男を待っていた。

もう、ずっと前から決っていたことだけれど、いよいよ、明日、岡田さんが都に帰ることになった。

上江洲さん、岡田さんとだんだん、私が大学に入った時から一緒に活動してきた人が居なくなるのは寂しかった。

彼を待っているといろいろな事が思い出された。

- 169 -

サークルの学習会、一緒に行った沖縄問題の調査旅行、バリケード闘争、芝郵便局の闘争、いろいろなデモ、学苑会の執行部に立つ時の迷台詞、そして、この間の学苑会の運動と私はいつも彼と一緒に活動して来た。
経研、マル研、サ連協、学苑会といつも日和見がちな私を彼は何一つ苦言も言わざ受け入れてくれた。
新入生歓迎集会の成功を手短に報告した。
後はもう話す事は何も無かった。
私たちは“白鳥”を出ると、“おもろ”に行き、静かな酒を酌み交わした。
「元気で。」と言うと、彼は微笑んでいた。

13

学内には大きな問題も無く、三里塚も一段落し、学生運動の闘争目標は今秋に予定されている沖縄返還に向けた闘いの第一弾としての4.28の準備に入って行った。

この頃になると、学苑会の主体性はしだいに色褪せ、小林君が青解を行った関係もあり青解と共同行動を組むことが多くなっていた。既に、全国全共闘連合、八派共闘も完全に崩壊していて、各党派も個別に集会、デモを行う予定だった。

4.28の闘いには学苑会としての統一行動は組まず、各自、各団体でそれぞれの外部の集会に参加することになった。

ノンセクトの運動の限界がどうしようもない現実として、次々に現れて来ていた事や岡田、小島、池田君など一緒に戦って来た人々が運動から、それぞれの理由を持ちながらも離れて行き、私たちが築き上げてきた運動、闘争の質を解り合える人が次第に回りから少なくなっていた事などの理由で、明大に於ける学生運動に対する情熱が急速に失われて来ていた。

- 170 -

4月28日、結局、私はこの頃から関わり始めたNDJの布川さんと一緒に青解の決集地点の東大駒場に行った。

青解は渋谷地区での解放区を目指していた。

夕方、駒場に着くと集会は終りに近く、直ぐにデモに移り、総勢七、八百人のデモ隊は突撃隊を先頭に大学構内から山手通りへと出撃した。

私たちも漫然とデモ隊の後に続いて、裏門を出て暫く進むと突撃隊と機動隊との戦端は切られた。しかし、青解の突撃隊は二度ほどの攻撃で、浮き足立ってしまい、続くデモ隊も直ぐに総崩れになって、戦いは呆氣無く終わった。我々はあれよあれよという間に東大の構内へ押し戻されてしまった。

布川さんは付近に留めて在った車をひっ繰り返して、大いに気勢を上げていた。機動隊が構内に突入して来て、学生寮の内まで入り込み、逃げ遅れた人々に暴行を加えた。私たちグランドの方に逃げた者が投石で反撃に転じたので、機動隊は間もなく構内から引き上げた。我々と機動隊は裏門の所で一進一退を繰り返し、戦いは膠着してしまった。私たちはグランドの堀を乗り越えて、そこいらの石を拾って再度の攻撃を試みたが、烏合の衆では機動隊を打ち破ることは出来なかった。

布川さんが「今日もこの辺までだな。そろそろ、我々、街頭ゲバート隊は潮時と見たが如何かな。」と言うので、私も「左様で。」と答えて、お互に顔を見合わせて笑ってしまった。

私と布川さんと葵さんの三人は寮に戻って、手を洗ってから表門から駒場駅に向かった。途中、機動隊の検問所が在ったが、私たちは手を洗っていたので、難無く通り抜けることが出来た。

電車に乗ってから「この辺は長年の戦いの知恵だな。」とお互いの手を見て笑った。

この日は、日比谷に集まった中核派だけが公園内のレストラン“松本楼”的焼き討ちを行ったが、その他の党派はカンパニア闘争に終始したようだった。この頃になると、三里塚闘争は例外として、我々のゲバート力と機動隊の持つ戦力の間に大きな差が出来てしまっていた。

- 171 -

4. 28を終えて、新学期の一連の行事が終わると、5月の連休に行われるリーダースキャンプが待っていた。

今年のリーキャンは福留君が研選委員長だったので、何か取り立ててすることは無かったが、我々も学苑会中執として招待されていた。学苑会執行部は内部の空疎化とは裏腹に資金的豊かさ、外面的な権威、大学当局との関係は益々強く成っていた。こうした中で、私は個人的なリクレーションと割り切って、リーキャンに参加することにした。

例年通り、信濃学寮で行われたリーキャンでは小林君が学苑会としての基調報告を行い、各分科会の討論会では赤軍派シンパの渡辺君や戦旗派の五十嵐君などが活発に意見を述べていたが、私には退屈な時間でしかなかった。

夜の酒盛りと昼のソフトボールだけが楽しみだった。

特に、夜の酒盛りは党派を離れて、個人として論談風発で、互いの人間関係を深めるのに大いに役立っていた。この時は日頃の党派的建て前を離れて、個人的な本音が出て非常に楽しいものだった。こうした酒盛りが人間くさい明大独特の学生運動を形成して行く要因の一つになっていた様だった。

楽しい休日を過ごして学内に戻ると、沖縄闘争の日程が差し迫っていた。

学苑会として何らの闘争も組み得ない無念さと、執行部に青解、戦旗派の影響力が益々強まって来ることに対抗出来ない無力感に苛立ちを覚えていた。私はしだいに事務局会議や中執会議を欠席する様になって行つた。

5月15日、我々はこの日を沖縄返還闘争の最大の山場と捕え、学苑会の統一行動として取り組んで、青解と共に渋谷の宮下公園に向かった。

宮下公園には反中核派の青解、フロント、ブンド各派のデモ隊四千人近くが集まつた。

7時過ぎに党派の部隊を先頭に明治通りを渋谷に向けデモが始まった。

公園を出発すると直ぐに機動隊が阻止線を張っていて、催涙弾の一斉射撃を受けてしまった。党派の部隊は二度ほどの突撃の後、フロントの部隊が崩れ始めると、呆氣無く壊走してしまつた。機動隊は催涙弾を雨露と降り注いだ後、攻撃に移り、我々は公園に押し帰されてしまった。公園を中心にゲリラ

戦に移ったが、公園内にはほとんど投石用の石も無く、一方的に押し捲られてしまった。

我々明大の部隊もチリジリなってしまったが、ペ平連を中心に行進が何とか再決集した。このままでは公園に機動隊が乱入して来るのは時間の問題だと判断して、前方の様子をレボさせると、「今、戦いは小康状態だが、依然、機動隊は公園を包囲した状態で、既にデモ隊の主力は攻撃を止めて日比谷に向けて出発している。」との報告だった。

今までの経験から今出発しなければ、機動隊は二、三度の挑発攻撃の後、一斉に公園に入って来て検挙行動に出ると思えた。

至急出発すべきだと判断した。

十五名足らずではあったが、明大の部隊の隊列を整えさせ、日比谷に向けて出発した。公園から再び明治通りに出るとデモ隊の投石と催涙弾の射撃が続いていた。我々はその間を通って、どうしても機動隊の壁の向う側に出なければならなかつた。学苑会旗、ペ平連旗を先頭に立て、私は全員にヘルメットを深く被り、密集の態勢を探らせて、静かにゆっくりと進んだ。

後からは石が飛び、前からは催涙弾と最悪の状態だった。機動隊の壁まで、何とか辿り着いた。壁を通過する時には例によって、散々足蹴りを受けたが、どうにか、宮下公園の戦場からの脱出に成功した。赤坂見附の交差点に着く頃には、我々の旗を見付けて、チリジリになつてゐた者も一人、二人と隊列に戻つて、五十人ぐらいの部隊に復帰してゐた。やっと日比谷公園に辿り着いて、先に到着していた明大の部隊もいたので、合流して総括集会を持つた。幸いに、多少の軽傷者は出したが、全員、逮捕は免れた。散々なデモだった。我々と機動隊の戦力の差を改めて、見せつけられた闘争だった。

その後も、秋まで何度も沖縄返還闘争は戦われ、この年の新左翼の最大の闘争課題だった。

街頭闘争での敗北は色濃くなつたが、学内では69年から、久々に訪れた政治の季節だったので、我々は連日の様に集会や大学周辺でのデモを繰り返して、気勢を上げていた。

一方、暫く鳴りを潜めていた民青系諸君の活動が活発化して來た。我々にとての政治の季節は彼等にとってもまた同様だったのだろう。法学部の我々の部分の力が強く成り始めていた。以前から、法学部自治会再建委員会の名前で存在していたが、実体が伴っていなかった。しかし、最近では自治会を維持運営出来る力を備えて來ていた。（法学部自治会は新左翼系と民青系に学苑会が分裂する以前は民青系が執行部を握っていた。分裂後は学生大会を開催していなかった。「学内では安全が保証出来ないので、学外で開催していた。」と民青系は言っていた。）我々は一時的に民青の活動を黙認して、彼等に学内で学生大会を開催させて、その上で、合法的に自治会権力を奪取することになった。（この辺は法学部らしい発想だと思った。）

法学部自治会再建委員会は学生大会開催を要求する一大キャンペーンを開いて行った。当初、これらの動きを民青系執行部は無視していたが、一方で我々は学内での民青の活動を黙認していたから、彼等も法学部自治会再建委員会の要求を無視出来ない状況になって來た。この様な状況で、遂に5月16日に、先ず、学生大会開催に向けた代議員大会を開催するという内容のビラを配布し始めた。この民青のビラに対して、Ⅱ法自再建委は代議員決議を持って、5.16代議員集会を学生大会に切り替えてしまう目論見だった。我々もⅡ法自再建委を中心に各クラスの代議員選出を進めて行った。獲得代議員の数でも、状況は我々に有利に展開していた。

5月16日、我々全共闘系と民青系が対峙した形で、同じ場所に臨むのは久し振りのことだった。集会はヤジと怒号の内に民青系執行部が退室すると

- 174 -

いう肩透かしの形で、呆気なく30分程度で、終ってしまった。Ⅱ法自再建委は現民青執行部はその責務を放棄したものと見なして、代議員による新執行部の選出を掲げた。民青系は我々の動きに対して、トロッキストの暴力を学内から排除すべき事が先決で、会場内外の安全が保証されなければ、学生大会は開催出来ないと言っていた。学内の政治的機運は盛り上がっていたので、反トロ、反暴力キャンペーンだけでは一般学生も納得せず、民青系執行部もこのまま学生大会を開催しないで済ますことは出来ない状態になって來た。何よりも、5.16の代議員大会の会場内で、小競り合いは演じたものの本格的なゲバルトは行使しなかった。この事は我々の側の内部にも少なからぬ動揺を起こしていた。即ち、前回の民青に対する対応は余りに生温かったのではないか。もし、このまま学生大会が開催されること無く終つてしまったら、Ⅱ法自の再建はどうなってしまうのか。といった意見が出て來ていた。そして、断固、民青を叩くべしという例によっての強行論が台頭して來た。この様に双方共に早急に学生大会を開催しなければならない状況に追い込まれて來ていた。民青執行部は5月23日に学生大会を開催するとビラで通告して來た。

学生大会の対応策を検討したが、前回の様な、訳の分からぬ流会騒ぎだけは避けようと言う事になった。Ⅱ法自再建委の当事者だった青解の熊田君やベ平連の高見君はあくまでも平和裡に合法的に対応して行きたいという意見だったが、前回の民青側の対応を見てもなんだかんだと理由を付けて、流会に持つて行く可能性も強く、断固、ゲバルトで決着を着けるべきとの強行意見も強かった。この頃、沖縄返還闘争を軸とした新左翼勢力の巻き返しで、民青とのゲバルトが各地で、頻発していた。民青も対新左翼党派闘争に東大闘争以来の伝統の正当防衛論を掲げて、ゲバルト路線を展開し始めていた。我々はⅡ法自再建委、代議員を先頭に立てて、大会開催を要請し、基本的に

は大会開催の方向で対応して行くが、何としても流会は阻止しなければならないので、ゲバールト部隊も待機させて、民青側の出方によっては会場を包囲して、実力闘争に入るという方針で、意見の一一致を見た。

当日の行動は法自再建委の青解のⅡ熊田君が指揮を取ることに決まり、ゲバールト部隊は5号館に待機させることにした。

学苑会もⅡ法自再建委の闘争を全面的に支持することになり、武器購入等の資金援助を決定し、棒やヘルメット、トランシーバーを購入した。

私の当日の役割分担はレボの指揮を執り、特に権力、大学の出方を監視することだった。

5月23日、4時頃に登校した。民青との力の対決は一年振りで、今回は彼等も可なり追い詰められているので、多分ゲバールトは避けられないだろうと思っていた。

4号館の学苑会室には小林、永田、福留君といった面々も緊張した面持ちで集まっていた。

暫く皆と話をした後、私自身レボの責任者として、状況を知っておく必要を感じていたので、大学周辺を歩くことにした。

先ず、駿河台の坂を降りて、駿河台下の交差点に向かった。交差点から小川町の方に少し行くと、パトカーが一台停っていて、私服らしいのが二、三人立っていた。また、大学院の前に一台と御茶ノ水交番の向かいの“ジロー”的前に一台と確認しただけで、既に三台のパトカーが来ていた。機動隊の姿は未だ見えなかった。

民青が集まって来ると思われた錦華公園に行くと未だ民青の姿は無かったが、レボらしいのが四、五人鋭い目線を送って来た。見たことの無い連中だったので、恐らく、明大の民青では無かったのだろう。

私の緊張感とは無縁に公園では学生のカップルがベンチで談笑したり、子供たちが無邪気に走り回っていた。

記念館の中に入ると、建物の中はひんやりと冷たくて気持ちが良かった。

3階に上って、短大に抜けて、図書館の横に出て、“ヒルトップホテル”的

前から4号館に戻った。異常と感じられる事は無かった。

5月末、太陽は未だ沈まず、初夏の暑さの余韻の中を吹く風が涼しい、季節としても最も快い季節だった。夕方の喧騒が始まる少し前の頃の様な時間で、街は静かだった。

4号館に戻ると、最終的な戦術会議が始まり、最高指揮は熊田君が取り、ゲバールト部隊の指揮は小林君が執る事が再確認された。

5時を過ぎて、青解の外人部隊やI部の部隊も色々と和泉、生田から集まって来ていた。彼等は11号館前で集会を行った後、5号館に移動することになっていた。

私は各組織から選ばれたレボを集めて、簡単な打ち合せを行った。

機動隊、民青増援部隊の動向を掴む為に、駿河台下の交差点、記念館と4号館の間の交差点、御茶ノ水交番前、大学院前、そして、錦華公園に各々二人以上を一組とした定点レボを配置し、その他を移動レボにした。

彼らを送り出して、5分も経たない内に、錦華公園に民青の部隊が現れ集会を始めている。との一報が入った。前後して、十台の装甲車が“ジロー”的の通りに到着した。という報告も入って来た。それらの情報を熊田君に伝え、我々は10号館前に移動すると伝え、レボ部隊にそのままの監視体制を維持するように命令した。

私や永田、熊田君らは武装せずに10号館に向かった。

小林君らは11号館に集っているゲバ隊を5号館に移動させて、指揮を執る為に11号館に向かった。二、三日前に購入して、学内の各サークル室に分散して、保管されていた武器が集められ、4号館の裏から5号館の地下を通って、玄関へと密かに運ばれた。

10号館に到着すると、隣の錦華公園には二、三百人の民青部隊が集り、集会を行っていた。暫くすると、集会を終えた民青部隊はトタンを打付けた大きな立看を先頭に、10号館へ向って来た。最初、我々はこの立看の意味する所が解らなかったが、部屋の入口のバリケードにする為の立看だと直ぐ

に理解した。今日の民青はヤル気だなと感じた。
彼等が地下一階の120番教室の会場に入り、我々も会場に入ろうとすると
彼等は法学部以外の学生は入場出来ないと言い出し、部屋の入口で押し問答
となつた。次第に双方激昂し、その内に殴り合いになってしまった。
民青は立看バリケードを堅く閉ざして部屋の中に立籠もつた。
予想外の事態が発生してしまつた。我々が入口で押し問答をしている間に十
名程の一般学生の代議員が会場内に入ってしまった。
この事は我々に徹底した作戦行動を執るのをためらわせる結果になつた。

予想通りと言えばそれまでだが、ここに民青との戦端は切つて落された。
直ちに、5号館に待機していたゲバート部隊に出動を指令した。しかし、学
生運動の弊害で、ゲバート部隊は指令を受けてから5号館前でシュプレヒコ
ールを繰り返し、隊列を整えてから10号館にやって来た。この間5分ぐら
いの時間を要し、民青側に迎撃の体制を整える貴重な時間を与えてしまつた。
学苑会、青解の外人部隊を主力とするゲバ隊が攻撃を開始した時には、入口
正面は堅固なバリケードで守られてしまつた。

私は阿部君と側面の様子を探ろうとベランダに出ると、民青達が隣の121
番教室に隠して有つた武器類を120番教室に運び込んでいるところにでっ
くわした。既に、ゲバ棒などは運び込んだ後だったが、ヘルメットを運んで
いる最中だったので、すかさず攻撃を加えて、ヘルメットを強奪することに
成功した。ダンボール箱からはヘルメットが48個も出て來た。

阿部君はこの攻撃に際して、敵の一撃を腹に受け軽い痛みを訴えていた。
私たちはまあまあの戦果を上げたが、正面の入口は依然として堅いバリケー
ドに閉ざされていて攻撃は遅々として進まなかつた。

玄関の方の様子を見ようと、階段を上つて行くと、機動隊が車から降りて、
攻撃準備を整えて、何時でも介入出来る状態になつてゐると、レポからの報
告が入つた。

外の様子が気になり、玄関に急いだ。

玄関では鉄柵の門を閉めて、主にペ平連やサークルの部隊が民青の増援部隊

や機動隊の介入に備えていた。
福留君やペ平連の小山君を呼んで、階下の状況を手短に話し、機動隊の様子
も知らせた。そして、10号館内の一般学生が館外に出始めているのを見た
私は、彼らに厳重に注意した。「一般学生は館内に閉じ込めて置け。必要な
ら、一人や二人、殴っても構わないから、バリケードを固めて建物から一人
も人間を出さな。一般学生が居る間は権力は介入出来ないぞ。」と言つた。
館内から一般学生が居なくなり、我々と民青だけになつたら、その時が権力
が介入して来る時で、戦闘行動の終りを意味していた。玄関のバリケードと
下の民青のバリケード、どちらが長く持ち堪えられるかの問題だった。
下に降りると、攻撃は進まず、依然として民青の築いたバリケードは堅牢だ
った。中央突破は難しく、上の状況からしてもそうそうチントラと戦闘を長
引かせる事はできないと感じた。

側面のベランダからの攻撃が有効に思えた。小林博俊君やそこいらにいた青
解の数人を呼び、ベランダに出て、窓を破つて、部屋の中に飛び込んだが、
気が付くと中に入ったのは、私と小林君だけで、後ろの青解の奴等は付いて
来なかつた。私が支えて居た大きなベニヤの盾も民青の竹ヤリ攻撃の前に支
えきれなくなつて來た。

「小林よ、こりゃ、ヤバイぜ。」と言うと、既に顔面がアザになり血が滲ん
だ頬でニヤリと笑つて「潮時だな。」と言つた。

ベニヤの盾を民青に投げ付けて、窓からベランダに転げ落ちた。彼等もベラ
ンダまでは出て来なかつたが、ベランダに転げ落ちた時に少し腰を打つた。
小林君といえば顔が浅黒くアザになり、頬からは血が滲んでいた。正面に戻
つて、逃げた青解の奴を見付けると、「ゲバートは命懸けだぞ。」と言うな
り殴ってしまった。

側にいた青解の諸君がびっくりして、「何するんだヨ。」と小林君の胸ぐら
を掴んで詰め寄つた。ちょうど、明治の水沼君が来て、「仲間内で揉めてる
時かヨ。」と言って、双方を宥めて収めた。

後で聞くと、その青解は上智大の一年生で、ゲバに参加したのが初めてだっ
たので、怖じ氣付いてしまつたのだろう。

最近は党派の部隊も何だか弱くなってしまった様だ。

正面では放水やバリケードの隙間からゲバ棒を突っ込んだりして攻撃が続いていたが、依然として、バリケードは突破出来なかった。

私は玄関の方が気になったので、一階に行くと、鉄柵の門は開かれ、既に、一般学生は館外に出てしまっていた。

福留君に「これはどうしたことだ。」と詰め寄ったが、「仕方が無かった。」と答えるだけだけで、現状はどうする事も出来なかった。

「機動隊は7号館の横まで進出して来た。」との報告がレポから入った。

上西さんら学生課の職員も10号館前の道路に来て、「これ以上は機動隊を導入させる。」と警告して来た。

その時、我々の側に重傷者が出た。と下の階から報告が入った。

一般学生という人質を失ってしまっては、戦闘の続行は困難と判断して、急いで階下に戻り、熊田、小林君らに上の状況を報告して、戦闘の中止を求めた。

永田君らは「もう少しでバリケードは突破出来るのだから、続行すべきだ。」と言ったが。

権力の介入を招いては意味が無いとの判断で、戦闘は中止された。

我々は隊列を整えて、10号館前の通りに出た。迂闊に7号館や11号館の方に向かうと、今度は機動隊と遭遇してしまうので、一旦、部隊を10号館前に待機させて、レポの偵察報告を待った。

「機動隊は“ジロー”の方に引き上げた。」と言って来た。

我々は民青が10号館から出てきた所を再度攻撃するということで、何人かのレポを残して、一旦、5号館前に引いた。

5号館前に引き上げて見ると、四、五人の軽傷者も出ていた。暫くすると、民青も10号館から出てきて、我々の方に挑発のデモを仕掛けて来た。

ここぞとばかりに撃って出たが、所詮、路上の遭遇戦なので、大した事は無かった。

民青も一度の攻撃で錦華公園の方へ引き上げてしまった。

この日の戦闘は結果的に大きな戦果を得る事も無しに終わった。

この日の戦いで、結局、何が得られたのだろうか。

我々が得たものは何も無かった。

法学部自治会の執行部を勝ち取るという戦略的目標も達成出来なかつたし、戦術的にも重軽傷者を出しました。

ゲバルトでも我々がそれ程勝ったわけでは無かった。ただ、民青の方が依然として弱かったというだけだった。

例によって、この日から一週間程度、御茶ノ水戒厳令が引かれ、不運な二、三人の民青、若しくはそのシンパが、多少のテロを加えられた。

私には興味の無い事だった。

それよりも、法学部の一般のクラス活動家に対して、我々の持つ暴力そのものを赤裸々に見せてしまったマイナス面の方が大きな事と思えたが、我々の学苑会の中には、それを問題として受け止める水々しい感性は既に無かった。

民青とのゲバルトは中途半端な形で終わり、我々は一人の重傷者を出した。

彼は法学部の一年生で、ゲバルトの最中に民青の竹ヤリが目と鼻の間に刺さり、脳に空気が入った状態で、重体だった。

入院、治療費として、二十数万円のお金が必要だった。

我々の責任で、金を集めることになり、学内や御茶ノ水駅頭で、カンパを集めることにした。しかし、私にはどうもこのカンパ集めということが主義を主張しつつも何か物乞いをしている様で、抵抗感を覚えて仕方がなかった。

それにカンパは実際にはそれ程の金額には成らないし、日を追って、集まりは悪くなるものだった。

もっと確実に金を集められる方法が無いかと考えていた。

NDUという学外の映画作りのグループに顔を出していたので、NDUの“モトシンカカラヌー”的上映会を行って、その売上げ金をカンパしようと思い、山本、安能君を誘って、上映会を行うことにした。

話は前に戻るが、ここで少しN D Uについて、述べておこう。

2月頃、高校時代の友人、宇野井君が会いたいと連絡して来た。

彼は早大で早稲田出版研究会に入って、活動していた。

「今、『闇一族』という雑誌の出版を始めたので、一緒にやらないか。」と誘われた。

私も出版社でアルバイトをしていたので、出版に興味も有ったし、また、自治会運動も行詰まっていた、何か新しい活動の場を求めていた時で、彼の誘いに少なからず心を動かされた。

現在はその雑誌の出版費用の捻出のために、鎌倉で或る保守系県会議員候補の選挙運動を手伝っているとの事だった。保守系の選挙運動というのには多少抵抗を覚えたが、四、五日考えて、鎌倉に向かった。

1ヶ月に渡る選挙運動は全く新しい経験であり、楽しいものだったが、当の候補者が落選してしまったので、出版費用の捻出は出来なかった。

開票が終わると同時にアジトは選挙違反容疑で、鎌倉警察署の手入れを受けた。我々は外出先していたので、難を逃れたが、夜逃げの様に鎌倉の街を後にした。当時、新入生歓迎集会の実行委員長だった私のバックが押収されてしまった。バックには新歓関係の資料や領収書が入っていた。

結局、我々の一味は誰も逮捕されることは無かったので、書類は無事返却されたが、警察は保守と新左翼の取合せを非常に不思議がっていたと、後日、鎌倉の関係者が話してくれた。

選挙で一山当てて雑誌を出版する計画は無残に崩れてしまった。

早稲田大学では既に反戦連合が革マル派に破れ去り、革マル派の恐怖支配が続いていた。宇野井君たち、早稲田出版研究会も学内での活動の場を失い、広尾のN D Uの布川さんの自宅に事務所を移していた。

N D U=日本ドキュメンタリストユニオンは早大OBの布川さんを中心に早稲田反戦連合の人々が沖縄のドキュメント映画“モシンカカラヌー”を制作していた。私が広尾の事務所に出入りし始めた頃は撮影が終って、フィルムの編集や上映会の準備が始まっていた。

- 182 -

私は出版研究会の一員として事務所に出入りしていたが、出版の方は資金難から閉店休業の状態で、やる事も無く毎日プラプラしていた。そのうちにN D Uの人々とも親しくなり、彼らの仕事を手伝うようになって行った。

“モシンカカラヌー”が完成した時期と明大での民青とのゲバルトが重なり、救援資金の捻出の為に映画会はちょうど良い企画だった。

N D Uの協力を得て、“モシンカカラヌー”上映会を行うことになった。

この間、学内での政治の動きの中で、私自身学生運動への興味が次第に薄らぎ始めていた。そして、新入生歓迎集会を行い、N D Uの人達と付き合う中で、政治活動よりもイベントに興味を持ち始めていた。

政治運動の中で果たせ無かった想い、一時のエネルギーの噴出、情念の高揚をイベントの中に見出だし、祭りの後に訪れる気怠さが好きだった。

映画会の実行に着手した。

フィルム代やチケットの印刷代などの費用は学苑会、研連、文連といった学内諸団体からの寄付で賄い、映写機も戦旗派の飯田君を通じて、和泉から借りることが出来た。

チケットを学内の各団体を通じて、売り捌くと共に、毎日、ビラを張り、夕方から大学院の前に出店を出して、道行く、サラリーマンやOLなど一般の人たちにもチケットを売った。

私たちの情宣活動も良かったが、それ以上に当時、沖縄返還が政治の最大の焦点になっていて、沖縄に対する人々の関心も高かった。しかし、沖縄に行くにはパスポートが必要な時代で、沖縄そのものの姿は以外に知られていないかった。

映画もよく有る左翼映画と異なり、沖縄を売春婦という位置から見るという内容の優れた作品だったので、チケットは予想以上に売れた。

上映会場の11号館4階の大教室は満員の盛況で、大成功だった。

映画会が終了すると、私は売上金を救対に渡し、残ったお金で山本、安能君ら上映を手伝ってくれた人々と、池袋で、一夜大いに飲み明かした。

- 183 -

イベントの成功に関する幾つかのセオリーを感じていた。
計画を緻密に立て、何よりも情宣活動を徹底させること。
チケットは販売出来るルートを通じて、半数をルートで売り捌くこと。
金銭に対する考え方をきちんとして置くこと。
我々が陥り易い誤りとして、活動家の政治集会ではないので、当日の会場では長々としたアジ演説はしないこと。
参加者はチケットを購入しているのだから、会場で不必要的カンパを集めないこと。
イベントは一般の市民生活に合わせて、夜9時ぐらいまでに終了させること。
以上の様なセオリーを感じた。
その後、私の基本的なイベントに関する考え方は大いに役立った。

16

一連の学内の闘争が一段落して、いよいよ、我々は学苑会権力をどの様にするかという一番厄介な問題に直面することになった。
昨年の12月の学生大会以降、我々執行部は新たな方針を出し得なかった。現状の情勢に押し流されつつ、その場、その場の戦術的な対応しか成し得ない状態だった。
3月の春休みの時点で、小林委員長が青解に行き、永田君が三里塚に行き、私が新歓にのめり込んで行った時に、実体としてのノンセクト学苑会権力は崩壊していた。
一方で、学苑会は学内の闘う諸勢力の調整機関として、大学当局に対しては学生の代表権を持つという責任が有るわけで、内実が崩壊したからと言って、その機能を全面的に放棄する事は出来無かった。
一時期、我々内部には全てを投げ出してしまおうという気持ちも有ったが、それは余りにも自分たちの運動に対して、無責任なことで許されることでは無かった。しかし、現実に、我々の執行部をどう終息させるかという事は難

- 184 -

しい問題だった。
既に、体勢の立て直しを図ったブンド戦旗派も今回は執行部に介入したいという意向であり、小林委員長が青解のメンバーに入っている以上、執行部の人選はより難しいものになっていた。
ブンド戦旗派は小林委員長の続投という人事案には難色を示して来た。
執行部内部でも私などの様に資質や能力の上から、断固、小林委員長で行くべきだという意見と、ブンド、青解のパワーバランスの上に立って、委員長はノンセクトから出し、執行部はノンセクト、青解、ブンドで構成すれば良いとの意見に分れていた。確かに、三勢力を持って執行部を構成すれば、学内の諸勢力を全て決集したことになり、自治会運営の面ではやり易いが、ノンセクトの位置は失われるだろう。そして、総花的自治会権力は一見学内での平和は約束されるが、実際問題として、何を行うにも各党派間の意見調整が必要となり、自治会としての機能は著しく低下するのは明らかだった。我々の力量は人員の質、量からも単独で、学苑会権力を維持するのは難しかった。
私は絶ての難しさを受入れても、小林功二君を委員長として執行部を打ち立てるべきであると主張した。小林博俊君らとベ平連やサ連協無き後、サークルで運動を展開しているL戦線に学苑会執行部への参加を要請する工作を始めた。だが、彼等の見解は我々が学苑会に出て来る時の土井君などの意見の蒸し返しだった。
確かに、運動に対する責任という言葉で、学苑会権力そのものを解体、分解させるというパンドラの箱を開け得無い、私たち自身も自治会権力を執行する過程で、ノンセクトという位置付けからは或る種の変質を余儀無くされて来たのも事実だった。しかし、私たちの要請を退けたベ平連やL戦線にも運動の確固たる担い手としてのノンセクトのパトスは既に無く、第二戦線としての醜い顔付きが有るだけだった。この様に工作が失敗する過程で、私たちの力の無さがいやというほど見せ付けられ、今更ながら、情況左翼の限界を感じさせられた。

学生大会は目前に迫っていた。
代議員の選出など事務的な事は次期組織部長に内定していた青解の大貫君が
私に代って全面的に行っていたし、議案書の作成も小林君や青解の諸君が進
めていた。

小林君や青解の諸君は我々の動きを静観していた。
党派的には私たちの動きが成功して欲しいと思いつつも、青解としてはどの
様な形の解決を見るにしろ、次期学苑会執行部内での大きな影響力を持つ事
は約束されていたので、ブンドと事を構える必要は無かった。
この様な情況の中で、私たちの工作は一人相撲を取るだけだった。
学生大会を二日後に控えた、6月10日、日曜日の会議で、私たちの小林功
二委員長の人事案はブンド戦旗派の強力な圧力の前に屈してしまった。
結局、永田修君を委員長にして、副委員長、事務局員を青解、戦旗派の双方
から出して、学苑会を維持して行く事に話はまとまった。

6月12日、学生大会は反対意見も無く、民青を除く学内新左翼の総決集
のシャンシャン大会で、滞り無く総てが予定通りに進行して行った。
私は遠い席から芝居を見る様な想いで、眺めていた。
大きな拍手に迎えられて、永田新委員長が演壇に立った時、その拍手の大き
さに比例する様に、私の胸は空しかった。
「人生の賭だ。」という岡田さんの迷台詞から飛び出した、我々の私の学苑
会はここに一年の驚きと戸惑いの連続の中を走り切って、その幕を下ろした。
学苑会を去る時、学生運動活動家としての明治大学での活動も終わった。
私は以前、一度、涙を流しながら、大学を去った事が有ったが、今、やはり
戻って来て良かったと思う。
「こんな大学二度と来るか。」と叫ぶ事は無かったが、もう、私の為す事は
無いなあという想いで、学生大会を終えて、恒例の御茶ノ水駅に向かうデモ
隊を見送っていた。

大学から離れた私はNDUの活動に本格的に関わる事になり、毎日、広尾
の事務所に顔を出していた。
各地で“モトシンカカラヌー”的上映会が始まり、夏には北海道で開催さ
れる、ロックを中心としたお祭り“リバティ and フリーダム”へフィルム
を持って行く計画もあり、忙しい毎日を過ごしていた。
大学に行かなくなってしまった、二週間ほど過ぎた頃、大貫君から会いたいと連絡が
来た。
彼とは新歓以来の友人であり、学内での数少ない私の良き理解者だった。
彼は青解らしからぬ感性の持ち主だったが、運動の究極の所では党派は必要
であると考えていた。
何時もその所で、私と意見は噛み合わなかった。
学苑会の終わりを見せ付けられた時、私も彼や功二の考え方が正しいのかな
あと思う事も有ったが、逆に、そこまで政治に固執する気持ちにはなれなか
った。
組織部長の任務を彼が引き継いでくれた事は、私には一つの救いだった。

“プティヤック”に行くと、「ヤー。」と彼が声を掛けて来た。
ほんの二、三週間、顔を会わせなかっただけなのに、もう、長い間会って無
い様な気がしたのは大学の事を考えない生活を送っていたからだろう。
「僕は今度、駿台祭をやる事になった。一緒にやってくれないか。」と彼は
切り出した。
彼の説明は意外な気もしたが、一方で、駿台祭の企画は一度やりたかった。
春の新歓、救対の映画会を企画、実行して行く中で、政治とは異なり、党派
だと何とかと言った七面倒な論理の介在することも無く、一点にエネル
ギーを集中して行くイベントに魅力を感じていた。

今までの企画が全て成功して来たこともイベントに対する私の思い入れを強くしていた。政治的活動では学苑会活動の中で、何等、現況を開拓する方策を見出だせなかった自分の限界を十分知らされたが、イベントなら、お祭りでいいのなら、今一度、やり切れる様な気がした。

「石川と一緒にやりたいし、君とやって来た事は何時も成功して来た、今度も君と組みたいんだ。」と言った。

政治闘争、全共闘運動の中で、垣間見る事は出来たが、遂に幻としてしか見る事の出来なかったものを祭りを通して、もう一度、見てみるのも面白いし、私も政治の中で、超え得なかった党派に祭りの場を借りて、一時、彼等を超えて得るか、一丁、試して見るか、という気になってきた。

大貫君の感性も党派の問題を除けば、私と同質の物を持っていましたし、春からの活動を通じて、ツーカーの仲に成っていた。コンビを組んでもうまく行くと、彼も私も感じていた。ただ一点、私にとって気掛かりなのは、彼が青解のメンバーなので、彼の意思に関わらず青解の党派的介入が行われるのでないか、ということだった。

「駿台祭をやろう。但し、青解の大貫とはやりたくない。大貫個人、君の感性と私は組んでやりたい。」と一言、言った。

彼は苦笑して、また、石川の何時もの悪い癖が出たなあとウインクして、「解った。僕と君が組もう。」ときっぱりと言った。

彼は酒が飲めなかつたので、もう一杯コーヒーを注文して、乾杯した。
温かいコーヒーは胸に熱く、口にはろ苦く、心に美味しい一杯だった。

早速、駿台祭実行委員会の結成準備に取り掛かった。

4号館一階の玄関に近い部屋を確保して、実行委員の募集を始めた。

私も大貫君も駿台祭の経験は無かったので、昨年の駿実のメンバーの協力を得たかったが、彼らの多くは不祥事に巻き込まれて消耗してしまって、この様な祭りに或る種の不信感を抱いて、実行委員会への参加に消極的になっていた。

この時期、学苑会は既にノンセクトの決集軸に成り得ず、私の様に活動の場

を失いかけていた人々も多かった。そこで先ず彼らに実行委員会への参加を持ち掛けた。その結果、研連の福留、II商闘の福田、ペ平連の山本、安能といった、これまで私たちと一緒にイベントを手掛けて来た人々が、快く駿実に参加して來た。

同時に学内の支援体制を固める為に、学苑会の永田委員長、小林副委員長、青解の熊田、戦旗派の飯田君にそれぞれ駿実への協力を要請した。

学苑会、青解は大貫君と私がやる事なので、全面的な協力を惜しまないと言つて來た。ただ、学苑会としては昨年の駿実の苦い経験が有るので、協力の条件として、目付役に小林博俊君を駿実の財政部長として参加させる事を要求して來た。私たちも去年の様な不祥事は絶対起こしたくないと思っていたので、永田君からの申出は当然な事だと思った。ただ、小林博俊君とは肌合ひが合わないので、嫌だなと思ったが、仕事と個人的な感情は別であると割り切って参加してもらうこととした。

戦旗派はやはり大貫君が青解である事や今度の学苑会の執行部を巡る一連の動きの中で、私が最後まで小林功二委員長擁護で、動き回った事での感情的なシコリも手伝つて協力の快諾は得られなかつたが、駿実に対しての反対、敵対行動は取らないと言つて來た。

学内の情勢は学苑会委員長に永田君が就任し、副委員長は青解、戦旗派から一名づつ出すことで解決を見ていたので、非常に落ち着いていた。

私たちは続いてペ平連に協力を要請した。

彼らの答えは個人としての協力は惜しまないが、組織としては関知しないと言う事で、何時も決まつて來た。そして、結果的には山本、安能君を中心に関員が駿実に協力してくれるのである。

個人としては實に好人物が揃つてゐるのだが、組織と個人の持つエネルギーに差が有りすぎて、その辺が私が経験して來たサ連協の運動と異質なものを感じざるを得なかつた。だから、学苑会執行部の権力を巡る時などの様に組織としての対応を迫られる時は全く無力だが、駿実の様に個人のエネルギーが必要とされる所では實に素晴らしい人々なのである。この様なペ平連を見る時、私は常にペ平連という組織には愛憎の入り交じつた感情を抱いていた。

次に、私たちは同じくⅠ戦線にも駿実への協力の要請を行った。

「研連の下のサークルとして、駿台祭には参加するが、Ⅰ戦線としては三里塚闘争に全力を挙げて関わっている時であり、君達の様な崩れノンセクトと協力関係を結ぶ必要は無い。」という返事だった。

これが現在サークルで、運動を展開している者達の言う台詞だろうか。

(Ⅰ戦線はサ連協が自然崩壊した後に、歴研、政研を主体に構成されていたが、サ連協と人的連続性は殆ど無かった。)

我々に対応した長沼君らは私とは肌合いの合わない連中で、これ以後の明大の運動の中で、常に日和見路線を執り続けて行った。

Ⅰ戦線には常に強い嫌悪感を覚えていた。

私たちが動き始めると共に、先に述べた面々に加えて、昨年の駿実のメンバーだった文研の鈴木、Ⅱ政自の堀江君、Ⅱ法の米山さん、Ⅰ部の多田君など多くの人々が次第に参加して来た。

大学当局にⅡ部駿台祭実行委員会の発足を通告し、交渉に入った。

当初、大学当局は昨年の不祥事を持ち出して、厳しい態度で、臨んで来た。

この点を突かれると、私たちは無関係だったと突っ撲ねる事も出来たが、学苑会も認めていた駿実でもあったので、運動の継承性という意味で変に居直る訳にもいかず苦しい所だった。

今年は私や大貫が責任を持って事に当たるので、昨年の様な事件は絶対起こさないし、この間の学苑会や新歓の成功の実績を見てほしいと主張した。

過去一年間に渡った学苑会を巡る様々な学生部との交渉を通じて、政治的な主義、主張は別にしての人間関係では信頼関係が出来て來ていたので、大学当局も我々の駿実をかなり高く評価していた。

政治闘争とは異なり、お祭りの企画、実行という事で、そう大きな対立も無く、以後、駿実と大学当局の友好的な関係は続いた。

名実共に駿台祭実行委員会は発足し、企画の立案に入った。

夏休みに入ると、地方出身の人々は帰省してしまい、私や大貫君など少数の

- 190 -

在京組が残っているだけだった。この時点では未だ、具体的な企画案はまとまらず、各サークルにも駿台祭への参加の要請を出したが、彼らの返事も具体的になるのは夏休みが明けてからだった。

こうした中で、我々は悪しき慣習である駿台祭の位置付けから文化運動論の構築といった、際限の無い討論に明け暮れていた。

文化を口にする時どうして、何時もこうなのだろう、我々は日共を、そして、或る種の戦後近代主義を少しも超えていないではないか。そこには常にプロレタリアートが居て、革命が在って、清く、正しく、美しく、これじゃ宝塚の方が余程ました。市民社会の中に幾らでも有るじゃないか。日常としての市民社会の方がずっと、清く、正しく、美しく、やってるじゃないか。

こんなセンスの中からは、三里塚闘争、水俣の映画に講演、ちょっとひねって、ゴダール、大島渚、若松孝二の映画にヤクザ映画の上映、浅川マキのコンサート……etc. と新左翼の感性の貧困さを映し出すに過ぎないランチコースの企画しか出てこないだろう。

尽きることの無い討論に少々うんざりしていた。

今回の駿台祭はこんなお定まりを超えないちゃ。

僕らが全共闘運動の中で、瞬時として垣間見た、あの感性を表現しなければ。闘いの敗北で強いられた屈辱を晴らしてやる。その為の駿台祭じゃないか。

新左翼の政治、文化感覚の貧しさは目を覆うばかりだ。何が左翼だ、革命だ。私は沈黙の中で、エネルギーだけが、方向の定まらないエネルギーだけがフツフツと蓄積されていた。

夜は大学で、駿台祭に向けた活動を行い、昼間はNDUの事務所に顔を出して、布川、土井、井上、関口さんらと“モトシンカカラヌー”の上映会活動を手伝っていた。既に大学の枠を離れた人々が日本の文化情況に確実な一撃を与えようと活動していた。

NDUの活動の中で、大学で交わされていた諸々の論議が非常に陳腐に思え、駿台祭も日本の文化情況に対して、確実な一撃を打ち込む場にしなければという想いが募るばかりだった。

- 191 -

さりとて具体的なイメージが浮かばず私は少々苛立っていた。

そんな時、関口さんから北海道にフィルムを持って、一緒に行く話を持ち上がった。私もこの北海道行きで何かを掴めそうな気がして、8月2日、“リバティーand フリーダム”に参加する為にバスで、北海道に向かった。

この年は、昨年から急速な勢いでフォークソングが流行して、各地でフォークやロックの野外コンサートが行われていた。岡林の時代が去って、拓郎たちの世代が台頭し始めた時代でもあった。

政治情勢が後退して行く中で、そのリアクションとして、フォークやロック、アングラという形で、文化情勢が前面に躍り出ようとしている時でもあった。

“リバティーand フリーダム”は大阪の女性が中心になってプロデュースして、北大やその他の北海道の大学の映画研究会が協力したフェスティバルだった。五日間に渡り、北大キャンパスを使って、映画の上映、フォーク、ロックのコンサート、前衛舞踏の舞台、野外オブジェの制作や映画に関するシンポジウムといった盛り沢山の内容だった。

N D Uは“モトシンカカラシヌー”の上映で参加した。

私と関口さんは北大の落語研の部室に寝泊まりした。

この部屋には大阪から来た野外彫刻の人たちも一緒に寝泊まりしていた。

彼らとは直ぐに親しくなり、五日間を楽しく過ごすことが出来た。

この時、北大キャンパス内にはマリファナが出回っていた。私も試してみたが、トウモロコシに似た強い香りがするだけで、何にも幻覚は現れず面白く無かった。どうも個人差が有って、マリファナは私には効かない様だった。私は関口さんの助手として参加していたが、映写も映研の専門家がいて、總て彼らが行ってくれたので、殆ど仕事は無く、専ら観客の一人として、各催物を見て回った。

先ず、びっくりさせられたのは明大のキャンパスと比較して、北大キャンパスの広いことだった。端から端まで歩くと有に40分はかかるてしまう。

やっぱり、北海道は広いなど変な所で感心した。

北大の人からは、昨年、一昨年と戦われた、対権力闘争や対革マル戦の武勇伝を聞かされたが、都会のビルの谷間での我々のドブネズミの様な戦いのイ

- 192 -

メージとは異なり、中世戦国時代の話を聞いている様で、広いキャンパスを使ったの戦いのスケールの大きさに感心させられた。

構内にはクラーク会館という立派な建物が有り、大きな食堂（我々は毎日ここで食事をしていた。）やスーパー・マーケットを思わせる生協の売店や大小二つの劇場（大劇場で、“モトシンカカラシヌー”は好評の内に上映された。）やホテル並の宿泊設備が整っていた。

聞くところによると、この建物は北大生協が建設したということで、私は北大生協はすごいなあと感心しながら、その食堂でラーメンを啜っていた。

この様に夜は大阪から来た人や北海道の人々の話を聞き、昼間は良き観客になって、精力的に各催物を見て回った。

古代緑地や頭脳警察の演奏を聞き、薔薇体の舞踏を見ると、私が今まで全然知らなかった大学などという枠を超えた所で、新しい文化情勢が起こりつつ有るの目の当たりにして、異質の物に出会った感動と共に何か頭の中のモヤモヤとした霧が晴れて行くのが感じられた。

映画のシンポジウムには竹中労、松田政雄氏が出席して、当時、流行だった。松田政雄氏の『ゴダールの風景論』に大いに話が沸いた。

私には聞く事全てが目新しく、内容はよく解らなかつたが、初々しい興味と感動を持って聞いていた。シンポジウムの後、出席者一同で近くのジンギスカン屋に繰出し、大いに飲み、語り合つたことも楽しい思い出となった。

関口さんはフィルムを持って、釧路を回り、私は札幌の親戚の家で二、三日遊んでから、再び、山形県の道佐で合流して、その若者グループが企画したフォークの集りで、映画を上映して東京に帰った。

N D Uが派遣してくれた十日間の旅で、私は多くの事を知り収穫の多い旅だった。

この旅で、駿台祭の具体的なイメージを創り上げる事が出来た。

- 193 -

東京に着くと、その足で、大学に向かった。
駿実の部屋では大貫君が一人で、待っていた。
「皆、どうした。」と聞くと、彼は疲れきった顔を向けて「誰も出て来ないんだよ。」と答えた。「ふーん。」とうなづいて、私は内心しょうがないなあと思ったが、ここで大貫君に文句を言っても始まらないし、そんな現実よりも、私の頭の中は今回の旅行で、駿台祭への具体的なイメージが出来上がりつつ有り、その事を早く話したいという欲求に駆られていた。
「心配するなよ。暑いし、暫く、休憩もいいじゃないか。」と笑った。
大貫君の顔は今までの疲れた顔と私の笑いに答える笑顔の間で、一瞬、戸惑った顔を見せてから明るく笑って「そうだな、北海道はどうだった。何か仕入れて来たんだろう。」と聞いて来た。
私は壇を切った様に話し出した。
“リバティ and フリーダム”的事を。我々が全然知らない所で、大学の枠を越えた所で、新しい文化情況が展開されている事を、ロックや薔薇體などの新しい舞蹈や映画会の反応などを熱っぽく話した。
これらのロックフェスティバルには与えられた時間と空間の中で、作り手がいかに面白く観客にアピール出来るかという問題しかなく。そこには作り手個々のアピールは在るが、現在という時間から遊離した所での一夜の夢でしかない事。所詮、現実の緊張関係の無い所では横文字のフェスティバルという軽い響きしか伝って来ない事など今日のロックフェスティバルの限界も話した。
我々が企画する駿台祭は時間と空間は与えられたものでも、我々の共通体験と学内情況を引き摺った所で、現実との緊張関係を持ち得るのではないか。
そして、基本的な私の駿台祭に臨む姿勢、イメージは69年の冬以降、我々の前にその権力的本質を剥き出しにして来た大学、幻想としての大学に対し

て、我々の復権と復讐の一矢を打ち込む事で、基本イメージの具体的な表現として、現実の学館解放と実行委員会本部企画として、大学でストリップの上演を行いたいと語った。
学館解放は我々が未だに負わされ続けている負債の返済であり、ストリップの上演は我々の大学幻想に対する情念の一矢だから。
ここまで、私は一気に喋り、大貫君はキヨトンとして聞いていた。
もう1時間近くも暑いこの部屋で、二人きりで話していた。
急に暑いことに気付き、首の汗を拭いながら「もう、誰も来ないだろうから、涼しい所で話そうよ。」と言って、“ブティヤック”に出掛けた。
熱いコーヒーと冷たい水を交互に飲みながら話を続けた。
「大学の教壇の上にストリップの舞台を作ってしまうのさ。」と言った時、「イメージとしても企画としても面白いが、具体的にやれるのか。」と彼が口を挟んだ。「具体的には未だ考えていないが、NDUの布川さんに相談すれば、彼は顔が広いから、何とか成ると思っている。」「それより、何より実現させることさ。」と答えた。
この夜、幻想としての大学に私たちの情念を持って、対峙するという基本イメージを確立出来た事で、話は大いに弾み、大貫君の疲労も何時の間にかけ飛んで行った様だった。

翌日、事務所で布川さんに北海道でのフェスティバルの報告を行い合わせて駿台祭へのNDUの協力を依頼した。布川さんは快諾した。
早速、布川さんを大貫君に紹介した。我々三人はすっかり基本的イメージで意気投合して、布川さんも全面的な協力を惜しまないと大貫君に約束した。
「田中小実昌さんを知っているので、紹介しましょう。彼ならストリップの世界に詳しいので、誰か良い人を紹介してくれるだろう。」と言ってくれた。
私たちの駿台祭はストリップと学館解放という二つの具体的なイメージを据る事で、大きく前進した。二、三日の間、私と大貫君はイメージについて徹底的に話し合った。二人の意見は完全な一致を見た。
8月20日過ぎ、「駿台祭実行委員会を再開するので登校されたい。」と帰

郷している人には電報で、都内に居る人には電話で伝えた。

8月末、我々に与えられた時間は確実に2ヵ月しか無かった。

駿台祭実行委員会は二、三人未だ帰省している者もいたが、ほぼ全員が戻って来て再開された。冒頭、大貫君がこれまでの消耗な討論に終止符を打つよう今年の駿台祭の基本路線、駿台祭の具体的なイメージの説明を行い、今年の駿台祭の実行委員会テーマは『……が、しかし、俺たちは……。』にすると発表した。

「これは委員長としての基本的な考え方で有り、色々な意見も有ったが、今年の駿台祭は僕の考え方で、進めて行きたい。」と締め括った。

それはまた私のイメージでもあった。

基本イメージが発表されてしまうと、今までの抽象的な議論は姿を消してしまった。そして、これまでに企画されていた催しを整理して、各自の分担を決めて行った。

大貫君が全体の統括責任者になり、私はプログラムの編集とポスターの制作、N D U の映画とストリップの企画を引き受けた。

サークルの関係は福留君が、前夜祭、ジャズ、アニメの企画は鈴木君が、赤軍派の映画の上映には堀江君が当たり、財政は小林君が、会場の設営については山本、多田君がそれぞれ責任者になって進めることになった。

私は布川さんに田中小実昌さんに会えるように段取りを頼んだ。

数日後、私たちは新宿ゴールデン街の飲屋“前田”に田中さんを訪ねた。

田中さんは雑誌の対談の後らしく、若い女性の編集者を伴って現れた。「大学祭でストリップ公演をやりたいので、協力をお願いします。」と言った。

すると、横にいた女性が「マー。」と一瞬、驚いた様子なので、私たちが考えている事や大学闘争の事やその帰着点として、大学の幻想を打ち破る為にストリップを大学に呼びたいと熱っぽく話した。

田中さんは暫く黙って聞いていたが「僕は政治的なことはよく解らないが、大学でストリップをやるという企画は面白いね。僕がストリップをやる訳に

- 196 -

は行かないけど、誰か適当な人を紹介しましょう。」と言ってくれた。「宜しく、お願ひします。」とお礼を言って、“前田”を出た。

新宿の街の頬を吹く風は爽やかだったが、頭は熱かった。

ストリップの実現に向けて大きな一步を踏み出せたことは嬉しかった。

翌日、報告すると大貫君以下全員がとても喜んでくれた。

二、三日すると、田中さんから連絡が入り、「立川の文化劇場の山中さんという支配人に話しを通して有るので、会って、具体的な事を話し合ったらいかがですか。」と言ってくれた。田中さんは約束を果してくれた。

テレビなどではいい加減な印象を受ける人だが、実際は真面目で几帳面な人なんだなあと感心しながら、立川の文化劇場に山中さんを訪ねた。

文化劇場は立川の駅から基地の前の繁華街を通り抜けて、表通りから引っ込んだ所に在る割りと小さな劇場だった。

山中さんは四十才ぐらいの温和な感じのする人だった。

田中さんに話した同じ内容をやはり熱っぽく話した。

話を聞き終えると「大学でストリップか。フーン、大学も変わったもんですね。私なんかが行ってた頃は、そんな事は考へもつきませんでしたヨ。」と山中さんは言った。「でも、企画としては面白いですね。大体の話は田中さんから聞いています。是非、乗らせてください。」と言ってくれた。

大学でストリップをやるという私の夢がこれで実現するぞ。

早速、私たちは具体的な打ち合せに入った。

山中さんは劇場を閉めて出演する訳には行かないで、劇場が終わってからの深夜公演なら可能だと言った。私としては一日通じて公演を打ちたかったが、確かに学生への付き合いで劇場を休む訳にも行かないし、どの様な形式であれ、何よりも先ず、大学にストリップを呼ぶ事が先決なのだから、山中さんの希望に沿うべきだと思った。

「出演料は深夜公演なので、七万円ほど必要です。」と言われた。

この金額が高いのか安いのか判らなかったが、その程度の金額なら幾らでも予算の中で出せる金額なので、「山中さんの希望通りで、構いません。」と

- 197 -

即座に答えた。

舞台の設定その他については、後日、また打ち合わせる事にした。

「参考にどうです。少し見て行きませんか。」と山中さんが言った。

「それでは遠慮無く。」と言って場内に入ると、インドネシアかフィリピン系と思われる舞り子が感しく、美しく、踊っていた。

私はそれから一月の間に三度ほどストリップを見る機会に恵まれたが、何時見ても楽しいものだった。

企画も次第に固まり具体的な準備作業に入って來たので、大学当局と予算折衝を含む交渉に入った。我々は約二百万円の予算請求を提出した。

この金額はあくまでも建前で、本音では百三十万円の線で交渉を妥結させる腹積もりだった。こうして交渉に臨んだが、大学当局は一発回答で百四十万円を提示して來た。

私が思わずニンマリしてしまったので、交渉は腰砕けになってしまった。

後は多少のやり取りは有ったものの、市毛副学生部長も大貫君もその辺で収めたらと言い、予算交渉は一回で終ってしまった。今回の交渉は我々の完敗であり、後で“私のニンマリ”は皆の非難を受ける事しきりだった。

この事は我々の完敗だったが、別の見方をすれば昨年度の予算が九十万円だったのに対して、今年は百四十万円という一発回答を持って、大学当局が交渉に臨んで來た事に見られる様に、大学当局との関係は政治的には特に学館解放の問題を抱えて緊張関係に在ったが、個々の人間に対する信頼感は高かった。

予算交渉の後では「昨年の様な失敗をせずに、今年度は良い駿台祭にして下さい。」と逆に励まされる始末だった。

10月になると日は短くなり、マロニエの葉も黄色に色付き始め、夕日がちょうどマロニエ通りに沈むようになる。

この季節のマロニエ通りの風景が大好きで、その情景は以前に書いたと思う。私がマロニエ通りの秋を見るのは四回目になった。以前、この通りの秋を見る時は感傷的な気分で見ていることが多かったが、今年は非常な忙しさの中で、秋を迎えていた。

新学期の始まりと共に御茶ノ水の街に学生が戻って來た。

大学当局との交渉も終え、具体的企画も決まり、我々駿実は11月1日の駿台祭に向って走り出していた。

この間、私は主にストリップの企画に掛かりっきりで、立川の文化劇場に足を運んで打ち合わせを続けて、企画の具体化を計ってきたが、もう一つの仕事、プログラムとポスターの製作は遅れていた。

プログラムも今回の駿台祭に於ける私たちの情念の表現の一つにしたいと思っていた。即ち、大学という巨大な力に対して、我々の今までの大手門から攻める闘いに代えて、駿台祭を使った掲手からの攻撃の一環として、プログラムにはヌードの写真と当時発禁処分になっていた爆弾闘争の教則本“薔薇の詩”的抜粋を載せようと考えていた。

“薔薇の詩”は以前から友人に借りていた物が在ったので、問題は無かったが、ヌードの方はモデルを探さなければならなかった。

当初、プロのモデルを使おうかという意見も出たが、それでは私たちが考えて來た事と違ってしまう様な気がした。さりとて、モデルになる人がいなければヌードは載せられないし、私の企画も壁に当たってしまった。

そんな時に、福留君が歴研の今野さんに当たってみようと言ひ出した。

早速、今野さんを歴研に訪ね、我々の考えを述べ、希望を伝えた。

彼女も我々の考え方を賛成してくれたが、考え方を賛成する事と自分が当事者になる事は別だった。私自身も観念的には権力に対する闘いと理解出来るのだが、個人の肉体を通して、具象化する事にはギャップがあった。

「私自身がヌードになれるか。」と問われたら「いいよ。」とは答えられない自分自身の矛盾を認めつつ「今野さんの肉体を借りて、駿台祭での私たちの想いを表現したい。」と頼んだ。

今野さんは二年後輩で、勝ち気な感じの人ではあったが、困ったと言いたげな目で、私の顔を見ていた。私ももう語るべき言葉は何も無く、黙って彼女の顔を見詰めていた。歴研の狭い部室の壁がなお狭く私に迫って来る様だった。

今ちゃんは煙草を一本取り出して、深く煙を吸い込んでから、小さな声で一言「いいわ。」と言った。

我々は連れ立って、駿河台下の“とん八”に飲みに行った。

撮影は明後日、朝、学苑会室と記念館で行う事を伝え、「カメラマンの他に私と福留君が立ち会う事になります。」と言った。これだけを話すと、もう言葉が口から出ることが重く感じられ、ただ、「駿台祭を成功させるんだ！させるんだ！」と心の中で、呟いていた。

10月も中旬にもなると、朝は清々しいというよりも少し寒いくらいで、特にこの日は小雨が降っていて肌寒かった。

6時過ぎに私と福留君、カメラマンの井上さんは4号館の学苑会室で今野さんを待っていた。

30分ぐらい待ただろうか。「遅くなつて、ごめん。」と言って、今ちゃんが長い髪を搔き分けながら、うつむいて入って来た。

「寝坊しちゃて。」と言ったが、その目は寝坊したという目ではなく、紅く燃えている様だった。

一瞬、彼女の目に氣負わされたが、「30分遅刻ですね。早速、始めましょうか。」と井上さんは一眼レフをカメラバックから取り出した。

「すみません。」と今ちゃんも今度は眠たそうな目を彼に向けて、服を脱ぎ

- 200 -

始めた。

「我々は外にいます。」と言うと、「一人は僕のアシスタントに残ってほしい。」と井上さんが言うので、福留君に「僕は外で待つから、君は井上さんを手伝ってくれ。」と言って、部屋の外に出た。

ホットしながら、今ちゃんの紅く燃えた瞳を小雨のスクリーンに映し、そのスクリーンにハイライトの煙を吸い込ませていた。30分ぐらいで、学苑会室での撮影は終わった。

私たちは第二撮影現場の記念館に急いだ。

この種の撮影は部外者が居ると出来ないので、どうしても人気の無い時間に手早く行う必要があった。

7時半を過ぎると、そろそろ御茶ノ水の街も人々が動き始めるが、この日はさすがに小雨の朝なので、道行く人もコートの襟を立てて急ぎ足だった。

そんな人々の間をコート一枚を羽織った今ちゃんを中心に私たちも小走りに走ると、私は羊の群れの中を裸の女性が歩いている様で、少し滑稽な気がした。

記念館の中は真っ暗で、冷気がひんやりと伝わって来た。

何時も学生大会や大衆団交で賑わう記念館は未だ密やかな眠りを貪っている様だった。私と福留君は手早くライトをセットした。ライトの中に浮かび上がった、今ちゃんの裸身が冷たく眠り続ける記念館の壁に息吹を与えていた。この瞬間、『死せる壁と生』をプログラム写真のタイトルに決めた。

井上さんは今ちゃんに少しポーズに関する注文を付けてから、20カットぐらいを撮り終えた。

私たちは撮影を終えて、駿河台下の“タロー”に行った。今ちゃんが疲れた表情で、コーヒーカップを抱いて、「おいしい。」と言った。

熱いコーヒーが緊張を解いて、疲れを誘い出した。

私は自分の想いを実現させる駿台祭の成功へ大きく踏み出した感じがして、疲労と活力が体の中で、入り交じって大きな渦を巻いていた。

数日後、ポスターの為の撮影が麻布の方のスタジオを借りて、N D U の布川、井上さんと福留君の手で行われた。

ポスターは今ちゃんが両手を突き出してあぐらで座ったポーズの写真を新御茶ノ水駅の長いエスカレーターの写真に刷り込むという構図だった。

現代の象徴としてのエスカレーターに肉体を持って、対置させるというのが制作意図だった。

撮影されたフィルムは一般のカメラ屋では現像出来ないので、井上さんの手で、現像された。百枚近い、同じ女性のヌード写真を見ることは楽しいというより苦痛を伴う作業だった。その写真の中からポスター用に一枚、プログラム用に四枚が選び出された。

早速、写真を印刷屋に回すと、プログラムの方は本村君というM L派の人が関係している所なので、問題は無かったが、ポスターの方はシルクスクリーンの関係で、一般の印刷屋に頼んでいたが、岡柄が問題だと戻込みする始末だった。何とか交渉して、多少の割増金と現金前金払いの上に領収書は発行しないという条件で、やっと話がまとまった。

ポスターとプログラムが出来上がったのは駿台祭の十日前だった。

この時期になると、駿台祭そのものが駿実という一実行機関の思惑以上に大きく成り始めていた。

その一つの現れとして、ブンド赤軍派からの資金カンパの要請が来た。

青解の大貫君が委員長に就任している以上、駿実としては受ける事のできない要請だった。しかし、赤軍派の要請を一瞥の下に断り切れない赤軍コンプレックスが私や大貫君をも含めた新左翼総体の中に存在していたのも事実だった。駿実は表面的には拒否したが、学苑会が闘う同志からの要請ということにして、五万円の資金カンパを秘密裡に行なう事にした。また、駿実は彼等に催物のスペースを与え、そこで得られた金に関しては関知しないと言う事で、彼等との話を着けた。（結果的には彼等の事情で催物は実現しなかった。）

こうして赤軍派からの要請に対する一応のケリが着くと、続いて、戦旗派か

ら駿台祭開催期間中に泊り込みを行うので、寝具の貸与を申し入れて來た。戦旗派は駿実に批判的な対応を取り続け、非協力の方針を打ち出して来ていたのに、それを今更、泊り込むのは彼等、戦旗派=Ⅱ政自の判断で勝手に行なえば良い事で、寝具の貸与を行なう必要は何處にも無かった。

駿実全員がその厚かましさに腹を立てて、戦旗派の要請を拒否した。

この件以降、我々と彼等の関係は更に冷やかなものになって行った。

どうもブンド諸派には長く明治大学を支配して來た体質が色濃く残っていて、金銭には特に鼻が利く様だった。

その点、青解は駿台祭に対して、協力は惜しまなかったし、党派として金銭的な要求を持ち出す事は一切無かった。青解の持つ優れた資質の一つだった。

駿台祭の開催が一步、一步、迫ってくる中で、政治情勢としては沖縄返還協定の国会批准を巡って、沖縄返還闘争が展開されていた。

党派間の問題としては青解と革マルの党派闘争が次第に激しさを増していた。

10. 21、国際反戦デーがやって来た。

駿実はあくまで実行委員会なので、政治的活動は行っていなかったが、私を除く駿実の各メンバーは、当然、各々青解、学苑会、ベ平連などの出身母体の第一線の活動家でもあった。

10. 21の政治行動を巡って、私と他のメンバーが対立してしまった。

「駿台祭を2週間後に控えて、今、駿実のメンバーが負傷したり、逮捕されたら、駿台祭の運営に支障を来すから、今回の10. 21のデモへの参加は中止するべきだ。」と主張した。しかし、大貫君を始め他のメンバーの意見は「我々は駿実のメンバーであると同時に全Ⅱ部共闘及び各闘争委のメンバーでもある訳だから、10. 21闘争を戦うべきだ。」と言うのである。

大貫君たちに我々が創り上げて来た、全共闘運動の良い部分の資質が受け継

がっていた。逆に、私自身が政治的活動基盤を失い駿台祭にのめり込んで行く過程で、駿台祭至上主義に陥っている事に気付かされた。

私の時々陥る近視眼的な悪い所であった。

実際問題として、駿実のメンバーは各組織の中核的活動家でもあったので、全員が 10. 21 に参加しないとなると、明大のデモ隊列に少なからぬ支障を来す事も事実だった。

10. 21 開戦では跳上がった行動は慎むことを確認して、参加することになった。

10月21日夕方、我々は明治公園に集まつた。

68年、69年の集会に比べると、参加人員はガタ減りだったが、一方で火炎ビン闘争が激化していた。参加人数とは別に 70 年代を切り開く闘争という意味で、空気の入った闘争だった。

集会の後、青山、六本木といういつものコースで、解散地の芝公園に向けて、デモに移つた。当初、多少の小競り合いは有つたが、全体的には平穏なデモだった。解散地点の芝公園に近付くと様子は一変した。

明大の部隊は青解の部隊の後に続いていたが、青解は芝公園に着くと火炎ビンで再武装して機動隊に攻撃を開始した。明大の部隊は両者の中央に巻込まれてしまった。このままでは隊列が乱れ、我々も混乱してしまうので、隊列を堅く組み直すと側面で、規制していた機動隊に体当たりを食らわせ、一気に公園まで走つた。石や催涙弾が頭上を掠める中、頭を低くして公園まで、百メートルの疾走だった。公園の中に駆け込んだ我々は石を拾い集めて、機動隊への攻撃を開始した。暫く、投石を繰り返していたが、遂に機動隊は公園を包囲して侵入して來た。もうこの頃の街頭闘争に於ける力の差は歴然としていて、機動隊は火炎ビンや投石に対しては容赦の無い催涙弾の水平撃ちで、攻め立てて來た。我々は次第に追い詰められて、東京プリンスホテルの脇の広い植え込みに逃げ込んだ。植え込みを包囲した機動隊は催涙弾をメチャクチャに撃ち込んで來た。地面に伏せると催涙弾が木々の梢に当り、カチン、ガチンと音を発して飛び交つてゐた。私は戦争映画の一シーンを見てい

- 204 -

る様な氣分がした。

機動隊が植え込みの中に入つて來た。後ろは増上寺の高い塀が在り、その向こうは墓地になつてゐた。大半の人たちは塀を攀登つて逃げたが、私には少々高すぎた。

仕方なく、植え込みを抜け出してプリンスホテルの方に逃げたが、私たち二十人ぐらいはホテルの前で、完全に機動隊に取り囮まれてしまつた。機動隊に背を向けて円陣を組んだ我々に、彼等は容赦なく殴り掛かつて來た。

私は円陣からも弾き出される格好になつてしまつた。ふと、幼い頃の幼稚園での椅子取りゲームも、何時も下手だった事を思い出し、殴り掛けつて來る機動隊員をボンヤリと眺めていた。すると、一人の機動隊員が私に殴り掛けつて來た。私は彼の目を見詰めていた。同じ年ぐらいの丸顔の男だった。

目が会うと、何かたじろいた風で、私を殴らず、背を向けていた円陣に向つて盾を振り下ろした。ひとしきり、無抵抗の我々に対する彼等の制裁が加えられた後、逮捕が始まつた。

リンチと逮捕をただボンヤリとストップモーションの映画を見る様に眺めていた。そして、私も二人の機動隊員に両脇を取られて、ハット、我に帰つた。私は引き摺られる様に連行されて行つた。この時、多くの者が逮捕されたので、私を引き立てていた一人が他の人を捕まえに行つてしまつた。

一人になった機動隊員は尚も暫く、私を引き摺つてゐたが、さすがに百キロを超す私の体重に辟易したらしく、「二度とこんな事をするなよ。」と言うので、萎らしい声を出して、「もう、しません。」と答えると、「さっさと逃げろ。」と言って、私を逃がした。

この時ばかりは体重の重い事に感謝した。

そのまま芝公園を離れ、大学に戻つた。

駿実の部屋に帰ると、二、三人のデモに参加しなかつたメンバーが残つて居るだけで、誰も未だ戻つてなかつた。

「皆、捕まつてしまつたのかなあ、駿台祭もこれで駄目か。」と苟々しながら皆の帰りを待つてゐた。

11 時を過ぎると、一人、二人と戻つて來た。安能君など何人かの負傷者は

出たものの、12時を過ぎには全員が元気に揃った。まったく、デモ好きな連中だなどと、私は内心改めて感心した。

福留君や安能君の話を聞くと彼らは増上寺の辯を越えて、墓地に入ったが、墓地も機動隊が包囲していてやはり散々な目に会ったようだ。

全員で駿河台下の“晩翠”に夜食を食べに出掛けた。

その夜のビールは疲れを大いに癒してくれた。

21

翌日から、学内外の闘争スケジュールを消化した我々は駿台祭へ全力を投入した。

ポスター・チケットの売り出しを始め。大学も休講になり、会場の設営も始まった。

私などは以前から、度々、大学に泊り込んでいたが、大学側から正式に宿泊許可が出て、多くの駿実のメンバーが泊り込むようになった。

学内はバリケード以来、久し振に深夜まで、光々と灯りが点り、賑やかさが増して来た。

チケットの販売や会場の設営が始まると、ペ平連やI部の文連や青解の諸君も熊田君以下、駿実に協力してくれた。

文連は本来I部の駿実の下に在るべきだったが、I部の駿実は応援団や体育会系の諸君が中心だったので、文連は形式的に彼等への協力はしていたが、実質的には我々II部駿実へ全面的なバックアップを探ることで、内部は固まっていた様だった。その外、短大の自治会からも協力の申出があり、II部駿実は益々活発に行動を展開して行った。

ここで、I部、II部の駿台祭実行委員会について触れると、66年の学費闘争以前は合同の実行委員会を組織していたが、学費闘争以後は和泉、生田地区は別にして、本校、駿河台地区のI部の左翼勢力は衰退してしまった。

- 206 -

その結果、駿河台地区は必然的にII部の学生運動が主力になって行った。

I部の駿実は応援団や体育会が中心になってしまい、政治的には無色な物になってしまった。それに引換え、II部の駿実は今日まで、常に学苑会の組織の中に組み込まれ、新左翼的学生運動の影響下に置かれていた。

ここ数年間は記念館などの共通の使用場所の日程の調整など事務的な話し合いは行われたが、実行委員会自体は完全に別個に組織されていた。

こんな事情だったので、I部の文連や短大の自治会が我々に協力を申し入れて来たのも必然だったかも知れない。（I部の中央自治会＝学生会はブンドの崩壊から、この時点では未だ再建されていなかった。）

我々は日中から夕方にかけては、チケットやポスターの販売、ビールやコーラの販売に関して各会社との打合せや契約、これは主に小林博俊君が担当していた。また、税務署に有料催し物の興行税の証明取り。（我々が税金を納めるというのは滑稽な事だった。）

夕方から8時ぐらいまでは各参加サークルとの打合せ。

8時以降は駿実内部の会議や御茶ノ水の街へのポスター張りや各種立看の作成、会場の設営と仕事は深夜にまで及んだ。

ヌードのポスターが次第に御茶ノ水の街を包み込んで行った。

ストリップの企画といい、ヌード写真のポスター・パンフレットなどは当時の学園祭の企画としては画期的だった。

駿台祭の事がラジオの深夜放送などでも取り上げられたらしく、反響は日増しに大きくなっていた。チケット類の前売りも好調だった。

私には会場設営などの大工仕事の能力や電気的知識は全く無かった。

バリケード闘争の時にも感じた事だけれど、II部には昼間様々な職業に就いている人が多かったので、人が多く集まると色々な才能の持ち主が居て驚かされる。

ペ平連の山本君は工業高校電気科出身で、配線工事はおてのものだったし、一年生の通称、白青君は家業が呉服屋さんだったり、同じく甲賀君は空調の会

- 207 -

社に勤めていた。1部の学館管理委員会の多田君は大工仕事が大好きで、立看作りやストリップの舞台の設営が非常に上手だった。

私の高校時代の友人で、電気大の福田君は当時数少ないオーナードライバー

で、彼と彼のポンコツN360は連絡や資材の運搬などに大いに役立った。

こうして、多才の持主が自然に集まり、各々の得意の才能が遺憾なく發揮された。

前日の深夜まで及んだ会場設営を終えて、正午近くに11号館地下の駿実の部屋で、疲れた目を擦りながら、10月31日を迎えた。

ベットから飛び起きると直ぐに一階に行った。

「天気は晴れているだろうか。」先ず、頭に浮んだ事だった。

外に出ると、10月末とは思えぬ暑さで、空は青々と晴れ渡っていた。

空を仰いで深呼吸していると、11号館の鉄柵に赤旗を縛り付けていた山本君たちが「石川さん、おはよう、良く寝ていたから起こさなかったよ。」と言って、私の姿を見て笑った。頭はボサボサで一週間以上も髭も剃って無い寝ぼけ顔の男が空を仰いでいる姿はどう見てもお笑いだった。すると、今度は突然、今ちゃんの喫茶店“リバプール”から大きな汽車の走る音が聞えて来た。その頃、リアスピカ付きのステレオが発売されて、ある電気メーカーが宣伝に貸出したステレオの音だった。

顔を出すと、「今、コーヒーを入れるから、ビールでも飲んでて。」と言った。

冷蔵庫から一本取り出して、ラッパ飲みした。冷たいビールが喉を通ると頭はシャキとして来た。

いよいよ駿台祭が始まるんだなと緊張感と活力が全身に漲って来るのを覚えた。

良ちゃん、白青、三善君たちが既に“リバプール”的前に設置された駿台祭本部に居た。

私の先程の姿を見ていたらしく、真面目な顔で「いよいよ開始だよ。」と言ってもクスクス笑うばかりだった。

- 208 -

どうも締まらない31日の始まりだった。

私は館内に入り、各サークルの展示室を見て回った。殆どのサークルは展示を終えていたが、未だ、飾り付けに余念の無いサークルも在った。

11号館を一回りして、本部の設置して在る一階の中庭に戻ると、「大貫さんから、至急、明べの部屋に来てほしい。」と良ちゃんから伝言された。

平連の部屋に行くと、大貫、熊田、高見君といった面々が駿台祭の開始と同時に学館解放闘争の最終的な打ち合わせをしていた。

「準備は完了かい。」と尋ねると、「完了している。」と大貫君が答え、

「後はセレモニーとどう結び付けるかだ。」と言った。

「学館の鉄柵はどの位で倒れる。」と尋ねると、「そうだなあ、切り込みは既に入れて有るから、15分も有れば、いいんじゃないかな。」と高見君が答えた。

「じゃあ、こうしよう、5時半頃から集会を始めて、6時に決行、鉄柵が倒れたところで、今ちゃんの“リバプール”的ステレオと本部のアンプを使って、インターを流す、そして、その間は全館の照明を消そう。インターが終ったら、照明を点けて、ロックを始めよう。」と提案した。

「鉄柵を倒した後、デモをして、御茶ノ水の交番をちょっとからかってやろうじゃないか。」と高見君が言うので、皆もその線で行こうという事で、話はまとまった。照明や音響は大貫君が、部隊の掌握、指揮及び道具類の搬入は高見君が責任を持って行う事になった。

部隊は5時に明べとII文の部屋に集めることにした。

打ち合わせを終えて外に出ると、大貫君と熊田君が私に話が有ると言うので、4号館のII文自の部屋に行った。

「話とは外でもないが、早稲田の状況は君も知っているだろう。」と熊田君が切り出した。

「駿台祭の期間中、解放派の外人部隊を明大に泊めたいのだけれど。」言った。「明治を出撃拠点にするわけか。」と聞くと、「そう言うことだ。」と

- 209 -

答えた。（当時の早稲田の状況とは、革マル派と青解との党派闘争の事で、早稲田を追放されていた青解が巻き返しに出て、革マル派との間で激しい党派闘争を展開していた。その後、川口君リンチ事件が起り、早大は大揺れに揺ることになる。そして、この頃から党派闘争は次第に陰惨なテロ戦となり、殺人も起きて、新左翼運動の暗い時代が始まろうとしていた。）

革マル派は全共闘運動の総体と敵対関係に有ったのは事実だけれど、駿台祭が始まろうとしている今ここで、党派闘争という厄介な問題を一つ抱え込むのは困った事になるなあと思った。大貫君もこうして一緒に来たという事は彼自身、青解のメンバーでも有る訳だから、彼の心情として、認めたいと思っているのだろう。しかし、こうして私を呼んで話すという事は駿実委員長としては私と同じ困惑を感じていたのだろう。駿実を始める時の話し合いで、駿実に党派性を持ち込まない約束していたから、彼の権限で、この事を決め無かったのだろう。

私は大貫君の誠実さが嬉しかった。

しばらく黙って考えていたが、「あまり良い話では無いが、今日までの我々と解放派の関係から言えば、認めざるを得ないだろう。僕がここで仮に断つたとしても、君達は4号館を使うだろうし、そんなことでお互いギクシャクするよりも、認めて泊って貰った方がすっきりすると思うよ。ただし、祭の期間中だから、11号館ではメットを被ったり、部隊行動は取らないで貰いたい。この事を守ってくれれば、それで良いと思うよ。」と言った。

「良かった。」と大貫君は言い、「僕らも出来る限りの協力は惜しまない。でも、この事は党派の軍事的な事なので、人には言わないで貰いたい。」と熊田君が付け加えた。「主な人には伝るが、それは当然の事だ。」と答えた。私と大貫君は11号館に向かった。

大学院の横を曲がってマロニエ通りに入ると、傾き掛けた午後の日差しがアスハルトをオレンジ色に染めていた。その色に照らされて、大貫君の顔も紅く燃えていた。

「始まるな。」と彼が言い、「始まる。」と私が答えた。

22

5時30分、10月末日の夕日はとっぷりと暮れた。

11号館正面の舞台で、最終的な音合わせをしているロックバンドを横にして、学苑会、青解、ベ平連を主力に七、八十人が学館解放に向けた集会を始めた。

聞き慣れたアジテーションの音色とロックバンドのエレキの音と祭の始まりを待つ人々のざわめきが奇妙に交ざり合って、学館前の広場を包んでいた。

私と大貫君は本部の席に着いて、満足感が胸に込み上げて来るのを覚えるが、儀式の始まりを見守っていた。

6時、大貫君が本部のマイクを通して、駿台祭の開催を宣言した。

同時に、今ちゃんの店のステレオからインターナショナルの曲がボリュウム高く流れた。

私たちや集会の人々もレコードに合わせて、大きな声で合唱した。インターの合唱が終わると、一度、館内の明りは総て消され、夕闇の中にスポットライトが学館前の鉄柵を明るく照し出した。

我々と学館を隔て、全共闘の運動に対する大学当局の力の対応の象徴だった鉄柵に太いロープが何本も掛けられ、人々の掛け声と拍手の中で、大きな音を発して崩れ落ちた。倒された鉄柵は手際良く学館横の堀に捨てられた。デモ隊は喚声と拍手に送られて、御茶ノ水交番に向けて出發した。

館内の総ての灯りが再び点き、ロックの強烈なリズムが広場を包んだ。

交番をセレモニー的に襲ったデモ隊も引き上げて来て、鉄柵が取り除かれて二倍に広がった学館前の広場では各所に用意された酒樽が割られ、酒が配られた。酒とロックと開かれた学館が祭の広場となって、駿台祭は盛り上がりを見せた幕開けとなった。

一方、権力は、マロニエ通りに機動隊を進出させて来た。

この夜、我々は何時もとは異なった方法で、機動隊に対応することにした。ロックバンドを背景に、前衛舞踏の0次元の裸踊りを先頭に歌と踊りで、マロニエ通りに繰り出した。

機動隊もこの対応にはいささか面食らった様子で、指揮官はマイクで怒鳴り散らしていたが、隊員諸氏の間からは卑猥な笑い声が漏れていた。この風変わりなデモが終わると機動隊も我々の意図を理解したらしく、交番横の“ジローの前に引き上げて行ったが、駿台祭の期間中、装甲車が三台交番横に張り付いたままだった。実際の我々には全く無かったが、こうして機動隊との緊張関係の中で、駿台祭は開幕した。

11時を過ぎる頃、やっと、奇妙なデモとロックコンサートが終了し、前夜祭も無事に終わった。

私と大貫君が館内の見回りを終えても40番教室では多田、山本君ら、明べや青解の諸君がストリップの舞台造りの最後の仕上げに、余念無く立ち働いていた。

つい先程、御茶ノ水の交番を襲撃して来た人たちがストリップの舞台造りとは、私はおかしくなり、「ゲバ棒持つ手にトンカチじゃ、似合わないね。」と言うと、皆、大笑いになってしまった。「今日の作業はこれぐらいにして、夜食を食べに行こう。」と大貫君が提案した。

本部の方に残っていた、福留、小林君を呼んで、「晩翠」に出掛けた。

第一日目を成功させた我々にはビールと餃子の味が殊の外、美味しかった。

11月1日、駿台祭二日目はウィークデーで、本部企画もNDUと赤軍派の映画の上映だけで、割合に暇な日だった。

赤軍派が予定していた“世界戦争宣言”は彼等の都合で、中止となってしまった。上映できれば都内でのロードショーだったので、残念だった。

大貫君は党派の関係で、必ずしも賛成してなかった。さりとて、正面きって反対も出来なかった。先方から中止を申し込んで來たので、直接口には出さなかつたが、内心、ホットした気分だったと思う。

- 212 -

NDUの映画は我々の情宣活動がストリップに偏っていて充分で無かったのと、学内での上映が二度目で、既に、多くの人がこの“モトシンカランヌー”を見てしまっていたので、客の入りは良くなかった。

私としては布川さんを始めとしたNDUの人たちの駿台祭への多くの協力に、映画を上映して、フィルム使用料を払えた事は金銭的に困っていた彼らに多少なりとも義理が果たせたので、良かったと思っていた。

昼間は閑散としていたキャンバスも夕方からは次第に活気を呈して來た。11月にしては暑い日だったので、学館前のビヤガーデン、おでん屋は繁盛していた。

8時過ぎ、11号館の各サークルの催し物を一回りした。

音研のゴーゴー喫茶店では不格好な踊りを踊らされる羽目に有った。

本部の前で、大貫君と落ち合い“キッチンカロリー”に食事に出掛けた。

「何とか、漕ぎ着けたなあ。」と言うと、トンカツを頬張りながら、ニッコリ笑って、「でも、石川ひどい顔をしてるなあ。」と言った。

考えて見れば、もう二週間近く大学に泊り込んでいたし、風呂にも一週間ぐらい入っていなかった。

不精髪を撫ぜながら「後、二日だから、でも、髭は似合わないか。」と答えて、「いよいよ、明日はストリップだし、頑張らなくちゃ。」と言った。

満足な気分でビールと食事を平らげて外に出た。

4号館の前まで來ると、向日から、福留君が怖い顔をしてやって來た。

「二人とも、何処に行ってたんですか。皆で搜していたんですよ。学内の雰囲気が何か変なんですよ。」と言った。

こういう勘は活動家をやっていると、自然に培われて来るものなのだろう。

11号館に戻ると、何も変わることも無く、人々が学館前の広場で酒やビールを飲み、騒がしくも楽しげな学園祭風景が繰り広げられていた。

楽しい雰囲気の中に緊張した線が一本張られている。何か変だ。本部に帰ると福留君達に会場内を見回らせた。

活動家達の持つ独特な雰囲気は私自身の中にも有る或る種の匂いの様なもの

- 213 -

で、同じ匂いを嗅ぎ分ける能力は自然に身に付いていた。
中庭とここから見える学館や11号館のベランダに目をやると、確かに見慣れぬ活動家風の人間が多く目に付いた。

同時に、現在の党派関係、学内の政治情況を素早く計算していた。我々と青解の関係を嗅ぎ付けた革マル派が来ている。学園祭という祭の情況、一般学生も多数いるこの場所で、ゲバトルに訴える様な事をするのは彼等だけであろう。それしか考えられなかった。

一般学生が居る間は未だ安心だが、夜になるとヤバイな。対策はどうするか。夜までに学内諸団体に協力を要請して、防衛体制を立てなければ。などと考えていると、青解の熊田君が7号館の方からやって來た。

「何処に行っていたんだよ。捜していたんだ。例の部隊が到着して、彼らも祭を見たいと言うし、君たちは居ないし、だから、僕の判断で、今、駿台祭を見せてはいるよ。10時には集約しようと思っているが、泊るのに何処を使ったらいい。それと少々ビンを持って来ているんだ。4号館に置くのは権力との関係でヤバイから、出来れば、11号館に置きたいんだけれど。」と言った。

私は二、三人のそれと目に付く、人間に視線を投げ掛けて、「彼らは皆、君の関係かい。」と尋ねた。「ああ、そうだよ。」と彼は答えた。「なーんだ。革マル派が来たと思ったよ。」緊張が抜けると同時に「彼らも駿台祭を楽しめばいいよ。そうだなあ、4号館に入れる分はそっちに泊って貰って、後は布団なんかも結構有るから、11号館の空いているサークル展示室でいいんじゃないかな。ビンの方は文研に頼んで、展示室の天井に上げる様にするよ。」と言った。

私たちが話していると、福留君たちも戻って來たので、駿実のメンバーに青解との件と今の情況を話して、了解してもらった。

福留君たちは青解の件は納得したが、「大貫さん、石川さん二人が会場を離れるのはまずいよ。それも黙って。」と非難した。

私たちも私たちの非を素直に認めて、「これからは、行き先を誰かに必ず伝えてから出掛け様にしよう。」と謝った。「まあ、寒くなつて來たし、今

日の行事も終った事だし、少し飲むか。」と言って、白青君に駿実の部屋から酒を持って来させ、小林君がやっていた店からおでんを出してもらい、皆でコップ酒を飲み交わした。

我々が広場で、酒を汲み交わしている間に、青解の諸君は密かにビンなどの武器を文研の展示室の天井に隠した。

10時を過ぎた頃、学生課の上西さんら職員が我々の所にやって來た。
駿台祭の期間中、彼らと我々は毎日、この時刻に一緒に館内を見回ることになっていた。

この間、学苑会の問題や駿実の交渉を通じて、上西さんとは、お互いの立場は違うものの個人としては大いに信頼感を持つ関係になっていた。

「上西さん、寒いでしょう。一杯、飲もうよ。」と酒を勧めた。

青解の諸君はビンを上手に隠したかなと思いながら、笑顔で、内心は苦い酒を飲んでいた。

大貫君に半分づつ回るから、その間に移動してもらう様に伝えて貰った。
暫くして、私は上西さんらと館内の見回りに出掛けた。

五階まで上ると、中庭の人々のざわめきも遠い潮騒の様で、11月の夜空が美しく、都会の灯が寒々しく夜空の回りを縁取っていた。階段を降りる我々の足音は館内にこだまして、建物はひっそりと寝入っている様だった。ベランダから目の前に見る学館は黒々として、何か、この明大の建物の中で、一つ取り残された様で、寂しそうだった。

「学館に灯が点ら無いと、11号館も何かしつくりしないなあ。」と言うと、「そうだねエー。」と彼も言って、私たちは暫く、闇に中に佇むことの楽しさに浸っていた。

「そろそろ、下に行こうか。」と彼が言い、四階、三階、二階と各階を見回り、いよいよ、地下の各サークルの展示室に向かった。

私の心は暫く闇の中に佇んで落ち着き、地階へ向かう時には、青解の事はばれたらばれた時の事だと居直っていた。

サークルの部屋を一つ、一つ見ながら、いよいよ、文研の前に来た。

彼は歩きながら「年々、研究発表をするサークルが減ってきたねエー。」と呟いた。それには答えず、黙って、ドアを開けた。

部屋の中には誰も居なかつたが、酒の瓶が置いて在り、多数の紙コップが転がり、灰皿には消し忘れた煙草が未だ煙っていた。今まで、多くの人が居たことを物語る様に室内には人息の温もりが残っていた。そして、火炎ビン特有の香りも微かに臭っていた。

「この部屋は臭いね。」と言って、ニッコリした。

「そうですね。酒でもこぼしたんでしょう。文研もしょうがないな。福留君に注意しておこう。」と言って、煙っている煙草を灰皿に揉み消した。

目が合うと、彼の目は「みんな知っているよ。」と言っている様だった。

「知っているならしうがないが、ここで駿台祭をぶち壊しても仕方無いでしょう。」と視線を送った。

「残りは半分だし、寒くなつて来たから、上で少し暖まりませんか。」と提案した。

「僕も少し寒いので、今、そう言おうと思っていたんだよ。」と答えた。

私たちはお互いにニッコリと微笑んだ。

でも、このニッコリの中には或る種のやらしさと恐ろしさと寒さが入り交じっていた。

私たちは中庭に戻り、冷えた体に燐酒を流し込み、ひとしきり談笑に華を咲かせた。

その間に青解の部隊は既に見回ってしまった部屋に密かに移動していた。

移動が完了したことを熊田君が知らせて來た。

頃合を見計らって、残りの半分を見回り、学内の巡回を終えた。

大学側も青解部隊の潜入を知っていたと思う。そして、彼らが明大で事を構えるのでは無いことも知っていたのだろう。

我々も学内では一定の力を維持していたし、下手に介入すれば、来年に予定されていると噂の学費値上げ問題に絡むと判断して、彼等も我々同様に駿台

祭が混乱することを嫌ったと思う。だから、我々の行動を黙認したのだろう。私と上西さんが談笑の内に11号館を歩き回っている時に、私たちの背後では多くの思惑と政治的な力が働いていた様だった。

私も駿実に協力を惜しまなかつた青解に多少なりとも借りを返せた事はよかったですと思っていた。

学外では青解と革マル派の血で血を洗う党派闘争が早稲田、法政などで激しく戦われていた。

駿台祭二日目の夜は底に多くの蠢く者達を抱えて、静かに流れて行った。

11月2日、駿台祭三日目、私は昼近くに目を覚ました。

学内に泊まり込んで、二週間以上経つ。風呂に入ったのは多田君の風邪を治す為にサウナにいったのが最後だから、もう、一週間は過ぎている。

顔は不精髭が目立つし、何だか、着たままのブレザーも薄汚れていた。

半年に渡って準備を進めて來た駿台祭、その本部企画の目玉であるストリップの公演が今晚、上演される。

舞台も既に出来上がっていた。前売り券の売れ行きも上々だ。後は開演を待つだけだ。しかし、大学祭で、ストリップを上演するのは初めての事だった。どうしても多少の不安は拭えなかった。

意識は研ぎ澄まされているが、体の方は眠りから覚めないといった状態で、机を寄せ集めた上に布団を引いたベッドで、そんな事を考えながら天井を眺めていた。

大貫君が入って来て、「石川、もう、昼だぞ、よくそんなに寝ていられるな。」と言った。

「ヤアー、もうさっさから起きていたよ。」と起き上がった。

「天気は。」と聞くと、「外に出て見なよ。いい天気だぞ。こんな部屋より、ずっと暖かいぞ。」と言った。

日の当たらぬ地下の駿実の部屋はさすがに肌寒かった。

この三日間、起きて先ず気になる事は天気だった。

祭はやっぱり天気が良くないと盛り上がらない。

中庭の本部に行くと、福留、山本、安能、多田君や良ちゃんといった面々が仕事に就いていた。

見上げれば、空は青く晴れ渡り、11号館、学館の回りに掲げられた、赤旗が青空に映えて鮮やかに旆めいていた。

この時、心の中にこれはうまく行く、駿台祭は成功するといった何か予感の様なものが漲るのを強く感じた。

11号館の館内を回ると、人々が溢れ、音研のゴーゴー喫茶や千代田中日などの部屋は盛況だった。四階のベランダから中庭を見下ろせば、人々がビールを酌み交わし、平和な学園祭風景が展開されていた。

昨夜、政治が鋭く交差したこれが同じ場所なのだろうか。と一瞬思う。

昼間の中庭に政治の影は無く、ビールと人々の笑いがそこを占めていた。

この光景に何か違和感を感じていた。

青解の部隊は密かに出撃していた。

漠然とそんな事を思っていると、後ろから、声が掛かった。

「石川さん、アニメが始まっていますよ。顔を出してくださいよ。」白青君だった。41番教室に行くと、鈴木君が入り口でモギリをやっていた。

「入りはどう。」と尋ねると、「まあ、まあだよ。見て入ってよ。」と答えた。

暗い室内に入ると、人いきれでムッとした。

教室のスクリーンにはカラーのアニメーションが映っていた。

しばらくアニメを見ていた。いや、見ていたというよりも暗い室内に一人で居た。

会場は八分程の入りで、NDUの映画は興行的に失敗だったが、アニメはまあまあだな、などと考えていたが、やはり、今夜に迫ったストリップの事が頭から離れなかった。20分程見て外に出た。

「成功だね。」と言って、本部に戻った。

- 218 -

「一時間ぐらいコーヒーを飲んで来るよ。」と良ちゃんに言って、駿河台下の喫茶店“世界”に行った。

それまで、殆ど“世界”を利用したことは無かった。

何時もなら“プティヤック”に行くところだけれど、今は一人になりたかった。

華やいだ雰囲気の学生達で混んでいた。皆、楽しく談笑していた。

そんな人々を横目にして、私は緊張感に包まれて、隅の席に沈んでいた。この緊張感は何時も何か事を前にした時に襲って来るもので、一人でその緊張感に包まれているのは或る種の快感だった。

一時間半ぐらいボンヤリと過ごした。時計を見ると5時近かった。

外出すると、入る時にはオレンジ色に輝いていた街も夕闇の淡いブルーに包まれて、駿河台下や御茶ノ水駅の方からはネオンの灯が点き始めていた。

駿実の全員を地下の実行委の部屋に集め、ストリップの公演時の各自の持ち場、役割分担を再確認した。

全員の顔にはそれなりの緊張感も有ったが、楽しみにして来た企画だけに、和やかな雰囲気が流れていた。

後の事は大貫君に任せて、自動車研の日暮里君の運転するマイクロバスに乗り込み、立川の文化劇場に向かった。

9時過ぎに文化劇場に着いた。山中さんら劇場の関係者が出迎えてくれた。公演の最終回が上演中だった。

事務所で最終的な打ち合わせを行っていると、何時も照明係りをやっている小父さんがもう横で、テープの準備を始め、楽屋でも出番の終わった踊り子さんが衣装を詰めて、出発の準備を始めていると話してくれた。

私たちは打ち合わせを終えると、何時もの様に舞台を見せて貰った。

最後の踊り子さん二人のレスビアンショーがクライマックスといった所だった。

山中さんが「出発の準備が出来ましたよ。」と呼びに来た。舞台の方を見て、

- 219 -

「あの人たちは出演しないのですか。」と尋ねると、「レズの人達はギャラが高いから間に合わなかったんですよ。」とすまなそうに答えた。私は少し残念な気がしたので、「じゃ、もう少し予算を取れば良かったかな。」と呟いた。

私たちは、山中さん、照明の小父さん、そして、七人の踊り娘さん（娘というのには少し老けた、お姉さんもいたが。）を乗せて、一路、深夜の甲州街道を御茶ノ水に向かって突っ走った。

用意して来たサンドイッチやジュースや果物を出すと、一応にお姉さん達は食欲旺盛だった。その内に芸人の持つ華やいだ雰囲気が車中を包み込み、私も楽しくなって来た。

彼女たちも大学で踊るのは初めてなので、とても楽しみにしていたらしく、一人のお姉さんが「実は私たち、昨日、10チャンの23時ショーに出演したの。観た。」と言った。「僕たちは二週間も家に帰っていないから、観られませんでした。」と答えると、「残念ねエ。でも、私たちテレビで、明日は某大学に出演するのよ。と宣伝しておいたからね。」と言った。「へえ、テレビで。」と驚くと、山中さんが「そう、だから、きっと、お客様の入りもいいはずだよ。」と笑った。「じゃ、頑張らなくっちゃ。」と言うと、お姉さん達も大笑いしていた。

11時半頃、11号館前に到着した。

マイクロバスから降りると、期せずして、ベランダや中庭に集まっていた人々から大きな拍手が巻き起こった。

一瞬、私は困惑してしまったが、お姉さん達はさすがに芸人で、すかさず、手を振ったり、投げキッスで、拍手に応えていた。

大貫君が駆け寄って来て、「石川、凄い人気だぞ。」と耳打ちした。

素早く、40番教室舞台裏の控え室に入った。

お姉さん達が控え室で準備を始めると、照明の小父さんに山本君と電気研の剣崎君を紹介した。

- 220 -

「彼らが、電気、音響、照明を担当していますから、テープの順序などを指示してください。」と言って、舞台の袖から会場を見渡すと、場内は満員の大盛況だった。

楽屋の控え室に戻ると、お姉さん達は出演の準備に忙しく、スーツケースから衣装を取り出し、ハンガーに掛けたり、化粧を直したりしていた。

楽屋には、酒、ビール、ウィスキー、おにぎり、寿司、サンドイッチなどが沢山用意されていた。

「学生さんの舞台って、サービスが良いのねエ。」と喜んでいた。

その側で、安能、多田君が日頃の荒々しさは何処へやらで、いそいそと彼女達を接待しているのを見ていると、思わず吹き出してしまうのを押さえるのが一苦労だった。

「お姉さん達の準備が整ったら、舞台の方に知らせてほしい。」と多田君に頼み、「ここでの責任者は君と安能君なのだから、くれぐれもお姉さん達に失礼の無い様に、また、やたらに外部の人間は入れるなよ。」と改めて注意して、舞台の袖の控え室に戻った。

青解の部隊を中心に編成されていた会場整理係りの掌握を大貫君に頼み、福留、三善、白青君達にはキップ、お金の管理に充分気を付ける様に改めて注意した。

会場は「早く、始めろ。」のヤジと拍手で、熱気と興奮の渦に包まれていた。

私は舞台に立ち、「皆様、大変、永らくお待たせしました。ただ今より、『性と文化と革命』を開演いたします。」と挨拶した。

場内は暗くなり、スポットライトにトップの踊り子さんの艶やかな着物姿が浮かび上がると、もう場内は割れんばかりの拍手だった。

一曲、二曲、着物姿での踊りから、いよいよ、踊り子さんが着物を脱ぎ始めた途端、スポットライトが消え、場内は真っ暗闇になり、テープも止まってしまった。

場内には拍手に替って、どよめきが走った。

山本君の所に走ると、彼と剣崎君は意外に落ち着いていて、「ヒューズが飛んだらしい。」と事も無げに言った。

「早く、直してくれ。」「場内は何とかするから。」と言って、ハンドマイクを取り上げ、「ただ今、電気系統の故障につき、暫く、お待ちください。」と説明した。

場内のどよめきは収まったものの、「どうした。ストリップを早くやれ。」「暗闇ストリップか。」「金、返せ。」といったヤジが次第に多く飛び交い騒然となつたが、それらのヤジも青解の諸君を中心とした強力な場内整理係りのおかげで、静かになって行った。

停電から5分ぐらいが経過しただろうか、山本君らの落ち着いた努力によつて、電気が通じ、照明が再び点灯された。

場内は前にも増した拍手と喚声に包まれ、ストリップが再開された。

踊り子さんの白い肌が赤や青のライトに艶やかに浮かび上がった。

その光景を眺めながら、私は一人酔っていた。

やつた。ロックアウト体制という壁で、私たちの前に立ちはだかって來た、幻想の大学が、今、私の目の前で、音を立てて、崩れ去つていく。

私の大学への復讐が果たされている。

二人目、三人目と踊り子さんの美しくも艶やかな肌が照明の中に映し出されるたびに、場内は拍手と喚声で熱狂の坩堝と化して行つた。

進行がうまく動き出したのを見計らつて外に出た。

場内の熱気がまるで嘘のように冷やりとした風が頬に心地好かった。

ベランダから見下ろすと、本部のテント前に二、三人の駿実のメンバーが居るだけで、中庭には人影もなく、目の前の学館は静かな深い眠りに入つてゐる様だった。

暫くぼんやりとそれらの風景を眺めていた。

背後から、「石川さん。」と呼び掛けられた。我に返つて振り向くと、福留、甲賀、白青君が立つてゐた。

「石川さん、これどうしようか。」と言って、白青君が札束の入つた箱を差

- 222 -

し出した。「いくら有るんだ。」と尋ねると、「二十三万円も有りますよ。」と甲賀君が答えた。「ずいぶん、集まつたな。大成功じゃないか。」「でも、この金、無くすなよ、4号館に帰つて、僕に入れて寝れよ。」と言うと、甲賀、白青君は「解りました。」と言って、帰つていつた。

会場の熱気に暑くなつたのだろう、大貫君もベランダに出て來た。

「石川、大成功だな。」と言うので、「今、甲賀君の報告で、金も二十三万円になつたよ。」と伝えた。

休憩時間になり、場内が明るくなつた。

同時にガヤガヤと人々が場内の熱氣を逃れて、外に出て來た。

多くの見知つた人達が「大成功だね。」「面白いよ。」と声を掛けてくれた。NDUの布川さん、葵さん、『闇一族』の倉垣君らも見に来ていた。

この企画の実現に大いに力を貸してくれた田中小実昌さんも来ていて「石川君、大学でのストリップは凄いねエー。だって、警備係りが酔つた客を摘み出したり、殴つてしまふんだから。」「でも、この企画、当たりだね。何より、大学の教壇を踊り子さんに占拠させてしまったんだから、愉快だよ。」と言つた。

警備係りの実体を思い浮かべると、思わず、苦笑してしまつた。

日頃、我々とは余り親しい関係では無かった応援団の諸君もやって來た。

この日ばかりは我々に敬意を表して、「實に面白い企画だ。」と挨拶に來た。大貫君が「大学の警備員の永田さんが見たいと言つてゐるんだけれどどうする。」と言って來た。

我々は原則的に大学関係者は場内に入れない事にしていたが、「もう、半分は終わつてゐるし、今日は応援団や体育会の連中もたくさん來ているんだから。永田の親父さんなら、いいんじゃないか。」と答えた。彼も「そうだな。今日はもう無礼講で行こう。永田の親父さんにも入つて貰うように伝えるよ。」と言つた。

- 223 -

15分の休憩が終り、場内が再び暗くなると、前にも増した、興奮と熱気の中でショーの後半が始まった。

私は場内が落ち着くを見届けてから、楽屋に行った。

楽屋では多田、安能といった、日頃は武骨な面々が、かいがいしくタオルを運んだりして、踊り子さんの付人といった風で“活躍中”だった。

出番を終えて、着替えてくつろいでいるお姉さん達の飲みっぷり、食いっぷりの良い事には驚かされた。

聞けば成るほどと納得させられるのだが、彼女達の労働は意外と重労働だった。季節がら、寒いのではないかと思っていたが、今日のように大学の教室が舞台では劇場に比べて天井が低いので、照明の熱や場内の熱気と蔓や着物やドレスを着て踊るので、それは、それは、とても暑いのだそうである。

出番を終えて引き上げて来る踊り子さん達の肌には玉の汗が光っていた。

飲食物とタオルのサービスは事の外、お姉さん達に好評だった。

「学生さんの舞台って、いいワ。だって、余りやらしいヤジも飛ばないし、皆さん、割りと上品よね。それに楽屋にはお酒も有るし、サービス満点だわ。私、こんな舞台なら、何時でも出たいわ。」と一人のお姉さんが話しかけて来た。

私は青解の警備係りの事を思い出して、思わず吹き出してしまった。

「エエ、私たちもこんな企画は初めての経験なので、お姉さんたちに失礼の無い様に充分注意していますから。」と答え、「でも、何時もと勝手が違って、踊り難いんじゃないかと心配していたのですけれど。」と言うと、別のお姉さんも話に加わって「そう、私達も大学というと、もっと堅苦しい所だと思っていたし、ほら、全共闘とか何とかと言う怖い学生さんの居る所だと思っていたの。だけど、そんな人は居ないし、皆さん、とっても親切なもの、とても良い雰囲気で、舞台が出来たわ。それにこの舞台装置を造るのは大変だったでしょう。」と言った。

「舞台を造ったのは彼ですよ。」と多田君の方を向くと、「大した事は無いですよ。」と笑った。

「でも、彼はその全共闘のとっても怖いお兄さんで、とても悪い学生なんですよ。」と付け加えると、「石川さん、よしてくださいよ。僕はとても生真面目な良い学生なんですから。」と言うので、「君が真面目な学生なら、悪い学生なんか居ないだろうが。」と言うと、一同、大笑いとなつた。

樂屋で楽しく冗談を交わしていると、大貫君が入って来て「石川、そろそろ舞台が終わるけど、例の件、どうしようか。」と言って来た。
「電気研に話は着けて有るんだろう。」と言うと、「話は着いているが、会場の人々に何と言って、説明しようか。」と言つた。
「外で話そう。」と言って、樂屋の笑い声を後にして外に出た。

予定ではストリップ公演の後、オールナイトで、朝までブルーフィルムの上映を行う計画だった。しかし、実際にはブルーフィルム入手する事が出来なかつた。

プログラムにはブルーフィルムを上映すると印刷してしまつた。

今からでは帰りの電車も動いて無いし、最低でも始発電車が走る時間まで、会場の人々にここに居られる場を提供しなければならなかつた。

一応、電気研と相談して、ストリップの公演が終わると同時に彼らの会場で、朝までのレコードコンサートを行つて貰う手筈になつてゐた。

だが、盛り上がつてゐる観客にこの事情をいかに説明するのかが問題だつた。下手な説明をすれば、企画そのものが取り返しの着かない失敗になつてしまふであろう。

その事は取りも直さず、我々の駿台祭全体の失敗を意味していた。

会場の観客の不興を買う事無く上手に伝えなければならなかつた。

大貫君と相談して、或る一計を案じていた。

踊り子さん達全員が舞台に上つて、いよいよフィナーレの挨拶が始まつた。会場はヤンヤの大喝采だつた。

一人の踊り子さんを残して、後の踊り子さんが舞台を降りると、入れ違いに私が舞台に上つた。

踊り子さんと並んで、舞台に立つと、ヤジと同時に大きな拍手が寄せられた。

暫く、さっき、お姉さんが言っていた様に舞台の上は暑いものだな、などと思いつながら、照明の眩しさの中でヤジと拍手を聞いていた。

拍手が多少取りかけた時、場内に一礼して、喋り始めた。

「本日は、多くの皆様が、駿台祭にお越し頂き、駿台祭実行委員会を代表して、厚くお礼を申し上げます。しかし、ここに一つ困った問題が持ち上がってしまいました。今、ストリップの公演が終わり、第二部の映画の上映に移りたいと思って居りましたが、確実な情報として、会場の内外に権力の犬が潜み、我々を弾圧せんが為に、機動隊の出動要請を含めて、既に準備を整えているとの事です。実行委員会と致しましては、駿台祭実行委員会であると同時に、来春に予定されている学費値上がりに於ける、全Ⅱ部共闘会議の中核を担わなければならず、今、ここでの権力の弾圧を、我々は不本意ではあります、避けなければならないと考えます。よって、第二部の映画の上映は中止せざるを得ない状況となってしまいました。我々としても誠に残念で、申し訳なく思っています。」と一気に話して、踊り子と一緒に観客に向かって、深々と頭を下げた。

会場はそれまでの陽気な騒動に代って、「権力ナンセンス。」「ボリ公、帰れ。」のヤジが飛び交った。しかし、ヤジは我々に向かって来なかった。

「我々は我々の責務として、この駿台祭の会場は我々の手に拠って、断固として防衛致します。今、現在、電車も走って無い時刻ですが、三階の31番教室の電気研の部屋では朝まで、レコードコンサートを行っています。この部屋、若しくは31番教室でお休みください。対権力との対応は安心して、我々にお任せください。」と言った。

ここまで言い終わると、再び、全員の踊り子さんを舞台に上げ、彼女たちと一緒に二度、三度とフィナーレの一礼を会場に向かって繰り返した。

ヤジは止み、喚声と拍手に場内は再び包まれ、拍手と手拍子の中を私と踊り子さんたちは舞台から降りた。

舞台の袖から私の方を見ている大貫君の目が「上手にいったな。」と語り掛けて来た。私もニッコリと頷いた。

控え室に戻ると、さすがにグッタリと疲れた。

- 226 -

「一生一代の大嘘を付いてしまったな。」と心の中で呟いていた。

権力の介入の微候は無かった。ただ、初日の学館実力解放の時に御茶ノ水交番へデモを掛けたおかげで、機動隊の放水車が一台“ジロー”の前に待機していましたし、パトカーも常にマロニエ通りと明大通りの交差する大学院前に停っていた。

この事実をチャッカリ利用させて貰った。「まあ。何時もの、お返しにこんな権力の利用方法が有ってもいいだろう。」と勝手に弁解していた。

楽屋の控え室ではお姉さん達が帰り支度を始めていた。

山中さんや田中小実昌さんが「石川さん、大成功だったね。」と労ってくれ、我々も満足だった。皆に酒や食べ物を勧め、和やかに談笑していると、福留、三善君が控え室に飛び込んで来た。

彼らは大貫君と会場の方を見ている筈だった。

咄嗟に何か不測の事態が起こったのだと思い「お前ら、どうしたんだ。何か起こったのか。」と聞いた。「いや、石川さん、大変だよ。十社ぐらいの新聞社や週刊誌の記者が記者会見をしてくれと、集まって来ているんだ。どうしょうか。」と言った。「そんな事か、会場の方は無事なんだろう。」と聞き、「僕は疲れているし、皆さんをこれから立川に送つて行くのだから、そんな事は君らで、処理してくれよ。」と頼んだ。

山本君にマイクロバスを中庭に着ける様に頼み、暫くして、バスが来たとの知らせを受けて、中庭に出て行くと、バスの回りを大勢の人が取り囲み、私とお姉さん達は喚声と拍手に揉みくしゃになりながら、やっとの思いで、明け方近くの深夜の街を立川に向かった。

文化劇場に着く頃には、夜も白々と明け始めていた。

山中さんを始め、一人、一人のお姉さん達にお礼を述べて、彼等を降ろし、明け方の街を大学に戻った。

帰りの車中で日暮里君が「石川さん、大成功だったね。こんなに面白い駿台祭は初めてだよ。」と話しかけて来た。「イヤー、皆の協力のお陰だよ。そ

- 227 -

れに今度の駿台祭が僕にとっても最後の活動だしね。」と笑った。

その内に眠ってしまい「着きましたよ。」と振り起された。

11号館前の駿実本部のテントに着くと、大貫、福留、山本、多田といった面々がコーヒーを飲んでいた。「終わったよ。」と笑うと、大貫君が「ご苦労さん、まあ、飲めよ。」とコーヒーを勧めた。

彼の差し出した、カップを手にして口にすると、コーヒーの香りの広がりと共に疲れが全身に広がって行った。

一つの大きな企画を成功させたという満足感が全員の顔に浮かんでいた。

皆の談笑の声を後にして、「僕は一眠りするから、ジャズが始まる頃に起こしてくれないか。」と頼んで、地下の駿実の部屋に行きズボンも脱がずに机を並べた上に布団を引いたベッドに潜り込んだ。

ベットに入ってみたものの、体はメチャクチャに疲れている筈なのに、興奮と満足感が私を襲いなかなか寝付かれなかつた。しかし、次第に疲労感が全身を浸し、自分の体を縮のように感じながら眠りに陥つて行った。

11月3日、外は三日間の晴天に代わり、私たちの駿台祭の終りを優しく包み込むように冷たい晚秋の小雨が降つていた。

12時過ぎに白青君に振り起された。寝起きの不機嫌な顔を向けて、「今、何時。」と聞くと、「もう、昼過ぎですよ。間もなく、ジャズが始まりますよ。」と答えた。

「フーン。そうか。そうだ。白青、お金はどうした。」と昨日の入場料の事を聞くと、「今日の9時に、デブコバさんが銀行に持つて行きましたよ。昨夜、石川さんがあんな事を言うから、お陰で、僕なんか、ちっともストリップは見られなかつたし、お金を抱えて、一晩中眠れませんでしたよ。」と笑いながら、不機嫌そうな声を出した。

「それは悪かった。今ちゃんの店で、コーヒーを飲もう。それからジャズを聞きに行こう。」と言って、ベットから起上がつた。

本部のテントには良ちゃんや大貫、福留君といった面々が座つていて、案内をやっていた。「会場の方は。」と聞くと、「山本、鈴木君らが行つてゐる

よ。」「本田さんも來ているから、もう、そろそろ、音合わせが始まると。」と言つた。「オーケー。」と答えて、店に入り、コーヒーとトーストを頼んだ。

今ちゃんは私にコーヒーを入れながら、「ひどい、顔してるね。」と笑つた。「そうかい。考えてみれば、一週間以上も風呂に入つてないし、それにあんまり寝て無いから、でも、この方が男前だろう。」と言って、私は不精に伸びた、顎の辺りの髭を撫でてみると服の袖からは汗の臭いもしていた。

“リバプール”ではビートルズのレコードが掛つていたが、私の頭にはビートルズは少し煩かつた。

早く、家に帰り、清潔な下着に着替えて、ゆっくりと風呂に入り、それから、“白鳥”で、あの泥コーヒーを飲みながら、ポケーと一日バッハの平均律でも聞きたいなア。と考えながら、トーストのマーガリンを少し無理して、胃の中に流し込んでいた。

1時から、本田竹軸トリオのジャズコンサートは以前に我々が学苑会室として、占拠していた商学部実習室で始まつた。外は小雨が静かに降り、4日間の駿台祭の最後を締め括る目的を得た企画だった。

会場は九分の入りで、コンサートは始まつてゐた。

解放された学館は我々の前に大きく扉を開き、本田さんの力強くも押さえの利いたピアノのメロディーが吸い込まれるように流れた。

本田トリオの演奏は疲れた私の頭に心地好く、ピアノ、ベース、ドラムの音の波間に私自身が漂つてゐるようだつた。

会場に来ている駿実のメンバーもそれぞれの想いを噛み締めながら、一人、一人が充足感と疲労感をその顔に滲ませていた。

本田竹軸トリオのジャズコンサートをもつて、総ての駿台祭実行委員会の本部企画は終了した。

ジャズコンサートも終わり、3時頃になると、訪れる人も無くなり、各サークルの展示室では展示物の撤去作業が始まつた。

我々も本部直営のピアガーデンの撤去作業を始めた。

撤去作業の進行を見る為に、11号館内を何回となく見回った。この四日間で、多くのサークルの人と知り合った。それまでも研連、学苑会といった我々の活動を通じて、社会科学系のサークルには多くの知り合いが居たが、今度の駿台祭で、音研、自動車部、空手部と言った、余り馴染みの無かったサークルの人たちとも話を交える機会を多く持てた事は愉快な事だった。

9時過ぎに会場の撤去作業を終えた。

我々は11号館地下の駿実本部の部屋に集まり、駿台祭の成功を祝って乾杯した。その後、いつもの様に駿河台下の“晩翠”に出掛け、遅い食事とビールを楽しんだ。

殆どのメンバーがこの一週間、学内に泊り込んでいたので、どの顔も不精髪が伸び少し煤けて、衣服は汚れていたが、全員が駿台祭を成功させた満足感に満ち溢れた良い顔をしていた。

誰もがビールと餃子をばく付きながら、ひとしきり四日間の様々な出来事、一つ、一つに纏わる失敗談に花が咲いた。

特に、ストリップでの私の挨拶は一生一代の名演技だったと、皆の賞賛的だった。それに引き替え、多田、安能君らの楽屋での仕草は、日頃の彼らからは想像も出来ないと失笑を買った。

皆を見ていると、来春に予想されている学費闘争も戦い抜けると確信した。

私は駿台祭を走り切った。

それから、二日、学内に泊り込んで、色々な借り物の機材、器物の返却やビールなどの売り上げの精算に当たった。

三日間の好天に恵まれ、晩秋なのに暑い日が続いたので、ビールやコーラ類は予想以上の売上げだった。

本部企画もストリップの興行が大当たりで、駿台祭実行委員会の決算は黒字になった。

当初、割当予算の外に貸付けていたお金は返済不要として、参加各サークル

- 230 -

や諸団体で利益を処分して良いと通達した。

田中小実昌さんはあいにく不在だったが、田園調布のお宅に伺い、ストリップの企画への協力のお礼を込めてウィスキーを届けた。

出演料の残金三万円と果物を持って、文化劇場に中山さんを訪ねた。

今回の企画は大成功で、面白かったと、とても喜んでくれた。「それにしても、大学でストリップが上演されるなんて、時代が変わったんだねエ。」と感慨深かけだった。

持参した果物を差し出すと、「出演した踊り子さんたちがまだ居ますから、石川さんが直接、楽屋に届けたら。」と言って、案内してくれた。

楽屋に入るなんて、夢のようで、胸を時めかせて、彼の後に続いた。

両壁に鏡が有るので、楽屋と言えば言える八畳ぐらいの広さの部屋で、鏡の前には踊り子さんの衣装が脱ぎ捨てられていると言った配で、想像していたよりも乱雑な所だった。部屋の真ん中に炬燵が置かれ、踊り子さんのヒモ氏達が花札をやっていた。

出演前の踊り子さんはまだ衣装を身に着けていたが、出番の終えたお姉さんはネグリジェ姿で、みかんを食べていた。

中山さんの後から、おずおずと部屋に入り、「先日は、どうも有り難うございました。」と持参した果物を差し出した。すると、大学に来たお姉さんが「アーラ、学生さん、よく来たわねエ。」と果物を受取り、「この人が、大学に出た時の学生さんの親分よ。」とヒモ氏達に紹介した。

「あんたが学生の親分かい。まあ、こちらへ。」と笑いながら、彼らは仁義を切るような格好をして、炬燵に誘ってくれた。

別のお姉さんが舞台から、裸で戻って来て、私を見ると「学生さん、来てたの。」と笑って、「私、大学に入ったのは、初めてだったけど、今の学生さんは、とても親切ね。」と語り掛けて来たが、裸の彼女を見て、何処を見ながら答えて良いのか分からず、困ってしまった。すると、一人のヒモ氏がタイミング良くタオルを投げた。きっと、彼女のヒモ氏なのだろう。

彼女は受け取ったタオルで汗を拭くとネグリジェを羽織って、隣に入って来

- 231 -

た。お白いの匂いが鼻をかすめ、はだけたネグリジェの胸からは豊かな乳房が見えて、やっぱり、目のやり場に困った。どうも、ここでは裸が日常的で、私の持っている羞恥心の方が非日常的であるらしい。

彼女はミカンを口に入れながら「この学生さん、偉いのよ。大学では大勢の人を使ってるの。皆、彼の前で挨拶するし、親分なんだから。でも、棒を振ったり、恐ろしいこともするんだって。」と言った。何と言って答えたなら良いのか解らず、「いやー、皆、仲間ですから、親分と言うことはありません。それに棒を振るのだって、必要な時だけだし、別に普通の人を殴ったりはしませんから。」と下を向いて答えた。「俺も前にテレビで見たけれど、ヘルメットなんか被って、ボリ公なんかともやるのかい。」とヒモ氏の一人が尋ねた。「ええ、必要な時には。」と答えると、「ボリ公は、我々にとっても、学生さんにとっても敵だねエ。」と言うので、私も「ボリ公にはお互い善い事はされませんから。」と言うと、「硬派と軟派でも、意見は合うねエ。」

中山さんが引き取って、一同、大笑いだった。

「おかげで、私たちの企画も大成功でした。新聞などにも載っていた様で、どうも、有り難うございました。」とお礼を言って、立ち上がると、「また、機会が有ったら、呼んでくださいよ。」とお姐さんは言ってくれた。

彼女や彼氏たちの届託の無い笑いや裸自体の持つ存在感に圧倒されてしまった。

彼女たちは十日間がワンステージで、南は九州、沖縄から北は北海道まで、全国約百軒のストリップ小屋を旅をしながら回るのだそうです。そして、先程の楽屋が彼女たちの旅の宿でもあるわけです。

有名なストリッパーになると劇場の方で、別にホテルや個室の楽屋を用意することも有ると言う話です。

帰り道、何だか雪の降る道を踊り子さんの後からバッグを引き摺ってヒモ氏が行く情景が脳裏に浮かび、ふと、気が付くと、私自身だった。そんな形でドロップアウトして、女と雪の降る道をバッグを引き摺って、旅をして、女と私、二人だけの共同幻想の中で、生きて行くのも悪くは無いな。などと勝手に色男にでもなった様な良い気分だった。

後始末も一段落したので、駿台祭実行委員会としてメンバーやその他、駿台祭に協力してくれた人々を集めて、小田急デパートに在った中華料理店“豪華”で、コンパを催した。

我々のコンパというと、何時も駿河台下の“ニューアサクサ”辺りが通り相場だったから、このコンパはその名の通り飛びっきり豪華だった。

中華バイキングに酒は飲みほうだいで、皆、大いに飲み且つ食べた。

私もそうだったが、特に地方から出て来ていた福留、多田、甲賀君と言った面々は師弟食堂の安定食しか口に出来ない毎日だったから、山のような御馳走には目を見張った。

飲むにつれ、食べるにつれ、苦しくも楽しかった駿台祭の色々なエピソードに花が咲いた。

昨年の駿台祭はお金を巡ってのゴタゴタで、途中で中止するという、不祥事を起こしてしまい、多くの優秀な活動家を失ってしまったが、今年はその様な詰まらない事も無く、全員で駿台祭の成功を祝える事は嬉しかった。皆の顔にも満足感が溢れていた。

二次会はスナックに行く事になり、新宿の雑踏の中を二次会へと繰り出した。しかし、私はこの三週間というものほとんど家に帰らず、疲労と睡眠不足で体力も限界だった。何よりも熱い風呂と心地よい眠りが欲しかった。皆と別れて家路に就いた。

例年の恒例で、大学当局には来年度は更に多くの助成金を出す様に要求して、赤字の決算報告書を提出した。しかし、実際の決算は四十数万円の黒字決算だった。

一部のメンバーからは利益処分に関してそのお金を元手にして、新しい文化活動を起こそうと言う意見も出たが、私や大賀君は反対だった。あくまで、

駿台祭は駿台祭であって、それ以上でも以下でもないと思っていた。利益を元手に学生事業を興せば、結局、去年の大閑、奥山事件の様な事が起り兼ねないと、私たちは思った。この四十六万円のお金の内、三十万円を明大救対にカンパして、残りの十六万円は新宿でのコンパ代を含めて、実行委員の慰労費と言う名目で、お金の有る限り飲んでしまう事にした。私はそれで良いと思った。この間の早稲田出研やN D Uでの活動を通じて、文化活動を興すなら、別に資金を集めるべきだし、自分たちのお金でやるべきだと、強く感じていた。

11月末になっても、我々は4号館の駿実のボックスに屯ろして、新しい文化活動を興したいと、言った願望やら駿台祭の余韻に酔っていた。色々な人の想いがゴチャゴチャに錯綜しながら、4号館の駿実ボックスは梁山泊の様な活況を呈していた。来春に予定されているらしい学費値上闘争に向けて、駿台祭実行委員会をそのまま全共闘の中核に据えて、ノンセクトの再建を計りたいと密かに願っていた。この事は党派の諸君、とりわけ、ブンド戦旗派の諸君には駿実のボックスが不良ノンセクトの溜り場と化していると、言う風に映ったらしく、我々との関係は悪化していた。

学内の政治情勢は駿台祭という祭の季節が過ぎて、学費闘争という政治の季節に移り変わろうとしていた。Ⅱ法自を巡るゲバルト事件の後、民青系諸君の活動は全く鳴りを潜めていたが、我々は駿台祭に青解は対革マル派との党派闘争に全力を傾けていた隙縫を縫って、民青系諸君の活動もまたぞろ息を吹き返して来ていた。11月末、駿実ボックスの電話のベルがけたましく鳴った。「大変だ、石川さん、今、民青に囲まれて、駿河台下の“とん八”に逃げ込んでいるんだ。早く、来てください。」と甲賀君が助けを求めて来た。「判

- 234 -

った。店から出るなよ。」と言って、電話を切り、福田君をベ平連、モグラ横丁に走らせ、私は青解、戦旗派のボックスに救援の要請に行った。青解の諸君は快諾してくれたが、戦旗派の諸君は「それは君達の問題だ。」と拒否されてしまった。

5分後、我々、二十人ぐらいが4号館の前庭に集まった。既に、動きを察知したのか、パトカーのサイレンも聞こえて来た。何人かは、ヘルメットにゲバ棒という出立ちだった。武装して来た人に、これは闘争では無く単なるアクシデントで、甲賀君達を助け出すだけで、ゲバをやりに行く訳では無い。レポも出していないし、場所も民青のテリトリーの駿河台下だから、最悪、ピケで突破するから、メットや棒は置いて行く様に言って出掛けた。

錦華公園を過ぎると、そこは民青の繩張りだった。しかし、それらしき人影は無かった。“とん八”に到着すると、全員に隊列を組ませて待機させ、私と熊田君が入って行くと、多田、甲賀、白青君が隅のテーブルに固って座っていた。「バカヤロー、面倒掛けやがって、勘定済ませて、早く、出て来い。」と怒鳴った。済まなそうな顔をして「すいません。」と皆に謝った。こんな所に長居は無用と、直ぐに大学に向かって、隊列を整えて歩き出した。暫く行くと、向こうからパトカーがやって来て「お前等、何してるんだ。」と警官が尋ねるので「お巡りさん、夜の散歩ですよ。」と言って立ち去ろうとすると、パトカーの中の男を指差して「こいつ、知っているか。」と言った。見ると福留君だった。一瞬、「福留の奴、ドジリやがって。」と腹が立ったが、甲賀君たちを救出に来たのだから、ここでパトカーのお巡りを相手にしても何の意味も無いし、福留君も我々とは無関係と言う事で通した方が良いだろうと、咄嗟に判断して「知らない。」と答えた。「そうか。」と言った物の警官は不審げな顔をしていたが、皆に「大学に帰るぞ。」と言って歩き出した。

大学に戻って、多田君たちが油を絞られた事は言うまでもない。
30分も過ぎると、福留君も無事に戻って来た。
お金も使い果たしたと言う事もあるが、この“とんハ”事件を持って、駿台祭以後の一連のコンパも打ち上げとなつた。
この何処か、マンガチックな事件は、暫く、皆の笑い種だった。

24

12月に入り、大学当局から来年度の学費値上げは見送るとの情報がもたらされた。
この情報は私にとって、衝撃的だった。
前にも触れたように、我々ノンセクトは明確に情況左翼だった。
情況をいかに真正面から捕らえ切れるかに、總てが掛っていると言っても過言ではなかつた。
今、我々にとって、決算軸となるべき学費闘争が幻となつてしまつた。
幻となつてしまつた闘争を食べて生きては行けない。
このままではノンセクトとしての駿実を維持して行くのは難しいし、その果てに見えるのはノンセクトの腐敗だけだった。
私には、もう、るべき事が何も残つていなかつた。

この四年間、愛し続け、多くの想いを与え続けてくれ、多くの人と出会い、そして、別れた、御茶ノ水の街に別れを告げる時が来たらしく。
来年に学費値上げが無い事を確認して、大貫、福留、山本、安能、福田君と言つた、この間の様々な運動と一緒にに担つて來た人たちに私の考えを伝えた。

12月の中旬、私の追い出しコンパが4号館の駿実ボックスでささやかに行われた。

- 236 -

宴もたけなわといった頃、永田の親父さんが「石川君、行つてしまうのか。明治も寂しくなるなア。」と言って、大きな寿司を持ってやって來た。
追い出しコンパはそれまでの何処となく静かな宴から、急に華やいだものとなり、我々は皆、心地よく飲み、かつ、食べた。
一度は涙して離れた御茶ノ水の街に、今、心から笑顔を持って別れを告げることが出来るのは幸せだった。

その街、明大通りを中心に左右に三百メートルの幅を持ち、長さ二百メートルぐらいの街。

青春の総てを打ち込んだ。
御茶ノ水の街、総てが愛しい。

私の御茶ノ水讃歌。

御茶ノ水讃歌 第II部 了

1972.9.20.～1981.5.31.

御茶ノ水讃歌

発行 平成5年1月10日

著者 石川 彰

印刷 福留 健二郎